

---

# ある少年の告白

ゆいまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある少年の告白

### 【Nコード】

N5260G

### 【作者名】

ゆいまる

### 【あらすじ】

いつも影のように付きまとう不安と葛藤を胸に、養護施設で親の迎えを待つ少年・伊太郎と、赤ん坊の頃に捨てられた真正正銘のみなしご風香が、施設の権利権を狙う何者かの影に立ち向かう。可哀想なのは誰？親に捨てられた子？親に置き去りにされた子？それとも……親を失くした子？

## 告白 1

孤独はいいものだということを我々は認めざるを得ない。

しかし、

孤独はいいものだと話し合うことの出来る相手を持つことは一つの喜びである。

バルザック

伊太郎はその日も窓の外を眺めていた。

孤児院、今風に言えば児童養護施設の中の彼の部屋。昨日、同室者が出て行ってしまったから、今日からしばらくは一人部屋だ。

六畳の部屋に二段ベッドとタンスが二棹、申し訳程度の本棚が一つだけの簡素な部屋。うち一棹は出て行った奴が使っていたから空っぽだ。本棚にも四冊しか本は並んでいない。伊太郎がゴミ捨て場から拾って来た古い文学集だ。

昨日まではその本棚もいっぱいだった。漫画ばかりだったけど、賑やかだった。伊太郎はマンガしか読まないそいつを軽蔑していたが、いざ、出て行ってしまくと、寂しいものだ。

アイツは、いる時もない時も、人を不快にさせるんだな。まさに不快の天才だ。そう愚痴りながらも、伊太郎は抜け殻のようなこの部屋を見回すのも嫌で、いつもより少し意固地になって外を眺めていた。

聖ペテロ児童養護施設。

伊太郎の部屋はここにあった。

宗教色バッチリのこの名前は、この孤児院を經營するのが教会だからだろうけど、そんな事は伊太郎には関係なかった。伊太郎は無

神論者だ。

もし、神とかいう奴がいるのなら、一度お目にかかりたい。お目にかかり、思いつきり罵倒してやるのだ。

『この独善者！』と。

「いたろ」

伊太郎が唇を突き出しながらそうやって老犬のように外を眺めていた時だった。鈴の音に似た軽やかな声がして、伊太郎の顔は一層ひきつり、その頬に赤みがさした。

そんな自分の怒ったようなその表情が窓に映り、その後方に見える笑顔に伊太郎は舌打ちする。

ちよつと面長で色の白い自分と、やや丸顔で日に焼けている彼女は表情も含めて、まるで違う生き物のように見えた。

「何だよ」

「また、ママを待つてゐるわけ？」

風香は肩のあたりで外に跳ね上がった髪を揺らすと、その大きな目をにんまりと細め、からかうように伊太郎を覗き込んだ。

「ママじゃない。迎えの人間だ」

伊太郎は、何かにつけて自分にちよつかいを出してくるこの女が苦手だった。

風香。

同い年の15歳だ。伊太郎がここに来た時、彼女はすでにこの住人だった。というより、風香は赤ん坊の頃からここにいらしい。児童養護施設で保護されてる子どもの事情にはいろんな種類があ

るが、伊太郎のように途中でここに来たのと違い、正真正銘、生まれてすぐに捨てられてここに来た風香は珍しい方だと思う。

風香は、赤ん坊のころ、この庭の大きな銀杏の木の下に捨てられていたのだそうだ。

夏に差し掛かる季節の暑い日だったという。彼女の名前どころか、身元を割るものは何もなく『風香』と言う名はこのシスターがつけたと聞いた。

「なあんだ、独りになっちゃたって、また泣いてるのかと思った。だって、伊太郎ってさ、いつもここで外見てんじゃん。アンタ、ここに来てからこうしてるから、もう五年になるんだっけ。怖いよ、うん、キモイ。アンタの姿、外から見たらどんなのか知ってる？幽霊そのもの！　ここいらじゃあんたのせいで、この窓がちよつとした心霊スポットになってるのよ。もう、教会の施設に幽霊なんてシャレにもならないわよ。どうせなら、もっと景気のいい顔出来ないの？」

風香はべらべらとその良く回る舌で矢継ぎ早に何か言っている。

風香はよくあの銀杏の木の股から生まれたんだと院の連中はからかっていたが、伊太郎はまず、間違いなく風香は口から生まれてきたんだろうと思っていた。

このお喋りさえなければ、結構可愛いのにさ。と伊太郎は勝手に隣に並んで外を見ている風香の横顔を盗むように見た。

風香はのんきな顔で鼻歌を歌い出している。きっと彼女はあれだ、マグロが泳いでいないと死んでしまうように、何か声を発していないと死んでしまうのだ。

そんな風に伊太郎がぼんやり考えている時、知ってる形の車が止まった。

車の停車音がする度、たいてい伊太郎の肩は期待に強張るのだが、この音だけは別だった。

特徴的な、端的に言えば下手くそな停車。白の軽ワゴン。  
ボランティアはあのご到着だ。

「あのおばさん、また可哀そがりにきたよ」

風香が苦々しそうにそう毒づいた。『可愛がる』ではなく『可哀そがる』その言い回しには伊太郎も賛成だ。あの太った豚が服を着たようなおばさんは、この子どもに週一度だけ絵本を読み聞かせに来るボランティアで、彼女がやっているのはまさにそれだからだ。

いつも、子どもたちを無理やりに集め、勝手に選んできた本を、そのだみ声で無理やり聞かせて帰る。施設に入所したばかりの子供にはそれなりに受けがいいが、長年ここにいる連中にとってはうんざりする存在だった。

その最たる理由がそのおばさんの口癖だ。

おばさんの口癖、それは

「『可哀そうな子どもたち。おばさんがママの代わりになってあげるからね、思いっきり甘えていいのよ』」

隣の風香がしかめつらでそのまねをした。あからさまに不快な色を浮かべるその横顔に、伊太郎は少々小気味く感じくつくつと笑った。

おばさんは、その巨体を揺らし『私はいいい人です』と言わんばかりに胸か腹かどちらともつかないそれを張って、玄関に続く道を歩いて行くところだった。

「なにが『可哀そうな子どもたち』ての。親がない『可哀そうつて決め付けがおかしいよ。親がいる子どもは皆幸せなのかって話。親のエゴとか都合に振り回されてさ、がんじがらめの奴隷のような

子どもなんかより、よっぽどこっちの方が幸せだったの。なのにさ、あのばあ、私がそう言っても『寂しいのね、可哀そうな子』って、おかしいんじゃない？豚耳、ぜったい言葉の変換機がついてるんだよ。その変換機をとおせば、全部おばさんの都合のいように聞こえるって奴がね。ああ、虫唾が走る。私、週の中で、おばさんが来る土曜日が一番嫌いよ」

やっぱり風香のお喋りは決壊したダムのようなだったが、この意見には伊太郎は大賛成だった。

親のエゴとか都合……その部分には胸が疼いたが、それでも、少しでもだけ独りきりになったこの部屋にいるのが、嫌じゃなくなった気がした。

## 告白 2

嫌いとはいえ、おばさんが来ると施設内にいる子どもたちは談話室に集められる。強制ではないのだが、断るのは至難の業なのだ。なぜかというところ……。

「あ、風香ちゃん、やっぱりここにいたんだね」

二人は柔らかなその声に振り返った。一人は煩わしげに眉を寄せ、一人は視線を彷徨わせながら。

その前者の伊太郎は声の主、恐怖の読書会からの使者、正しくはこの施設の保育士、司遼太を軽く睨み返した。

司は背が高く、顔も良い。けっして濃い顔立ちではないが、優しい印象を与える優男だ。昔、俳優だったとか、モデルだったとかの噂はあったが真実は定かではない。ただ、確かなのは……。

「はい」

いつもは口を塞いでも話し続ける風香の口数が、彼の前だけでは激減する事だ。と、いつても、人並みになるだけの話なのだが。

風香は視線を司の胸のあたりでうろうつらせながら、小声で続ける。

「あ、でも、たまたまなんですよ。今日から伊太郎君、ここ独りになるからさみしいかなって思ってる」

「風香ちゃんは優しいんだね」

「そんなあ」

伊太郎『君』だあ？さつきまで呼び捨てにしていたくせに。

伊太郎は豹変した風香を訝しげに見つめた。その風香は目を潤ませ柄にもなく照れ笑いしている。

いつもだ。いつも風香は司を前にするところなる。そしてそれを目の当たりにする度に、伊太郎は訳もなくム力つくのだ。

「読書会、始まるから、二人でおいでね」

「はい」

風香は毎度の様に調子のいい返事をして、司が他の子どもを呼びに行くのを手を振って見送る。そしてやはり毎度の様にその影が見えなくなるとすぐに、風香は溜息を盛大につきながらこう言うのだ。

「伊太郎、読書会、行くよ」

と。あの優男に絶対服従の信者風香は、独裁者の顔となり無理やり伊太郎の腕を引っ掴む。いつものことながら伊太郎はうんざりし、やはりこれもいつものことながら悔し紛れに愚痴を風香にぶつけてみる。

「あのババア、嫌いなんじゃないのかよ」

効果的な反抗だなんて思っちゃいない。でも、悪態の一つも付いてやりたい所をこんな些細な愚痴で抑えてやっているのだ。

何故なら、きつと悪態をつくのなら風香自身気づいているのかどうかも分からない、彼女の司への想いを指摘するような事になる。それだけは、なんだかしたくない気がしていたから。

そんな複雑な伊太郎の心中をまるきり無視し、風香は唇を尖らせ

る。

「司さんが声をかけに来てくれたのよ！しかも、わざわざ私を探しに来て！これで行かなきゃ馬鹿でしょ。そうよ、大バカモノよ。それに、行けば、司さんのヴァイオリンも聴けるのよ。あのババアの話は置いて、あれを聴かないのは人生の大いなる損失よ」

『私を』？いつから風香だけを奴が探し回ってた事になったんだ？耳にご都合変換機がついてるのは、風香の方じゃないのか？

三倍返しの反撃に伊太郎はそう思ったが、言った所で今度は五倍返しにあうはずだ。

そして結局今週も、伊太郎は聞きたくもない読書会へ『風香』に付き合う事はめになった。

読書会にはほぼ施設の人間全員が集められる。ババアの話を知りたいというより、誰もが司のあの呼びかけを断れないからだ。

伊太郎は一番後ろの椅子に、ここから一步も前に出てやるものかとしがみつきながら、次々に子どもや職員達を集める司をチラリと見た。

不思議な男だと思う。口調も態度もいたって柔らかいのに、この施設で奴に逆らえる人間は一人もない。反抗しても、優しくくるまれ、気がつけば奴のペースで話が進み、結局は奴のいいなりになっってしまう。それでいて、たいていの人間はそれで不快にはならない。

まあ、伊太郎自身は彼からなにかを頼まれる事はこの読書会への誘いくらいで、普段は特にはないのだが。それにしても伊太郎はなんだかそういった奴の隠れた押しの強さが気に食わなかった。

「司さんって、ボランティアにも理解あるのよね」

酔っぱらいのような顔と口調で、風香が司に見とれながら独り言のように呟いた。確かに、読書会だけでなく、司は地域との交流も大切だからとボランティアの受け入れはもちろん、自身も入所者と一緒に清掃活動などの活動をしたり、募金活動を行ったりしている。だからどうした、とも思うが。

読書会が始まった。

ババアのだみ声が会場に響き始め、伊太郎はうんざりとした気分になって、背もたれにぞんざいにもたれかかった。

今日の本はもうこれで聞くのは10度目になるダチョウが片足になる奴だった。ちなみに、自己犠牲的な内容のこの話は伊太郎の中でベスト5に入るほど嫌いな話だ。

そんな隣で風香が、部屋から出ていく司の方を見つめていた。

風香が溜息混じりの声でまた呟く。

「かつこよくて、優しくて、音楽が出来て、理解者で……非の打ちどころもないわよね」

伊太郎はなんだか悔しくなって言い返してみた。

「案外馬鹿かもよ」

「司さん、帝都大出身よ」

「女にだらしないかも」

「仕事が忙しくて彼女いないって」

「ギャンブラーだったり」

「こゝ両親に毎月仕送りしてるらしいよ」

「酒乱とか」

「お酒は飲めないんですって」

「お前はマニアか！」

伊太郎は、すぐに打ち返してくる卓球のラリーの様な風香の淀みない返答に思わず音を上げた。

### 告白 3

風香はうるさいコバエを見るように伊太郎を睨む。

「伊太郎がつまんない事言うからでしょ？アンタ、何にも知らないくせにさ。だいたい伊太郎ってちよっとヒガミっぽいんだよね。何でもうじうじうじうじ、ウジコウジオか。うじうじ星人か。伊太郎の周りって常に梅雨って感じよね。くらくくて湿っぽくてさ、やになっちゃうよ」

ここまではいつもの事だ。伊太郎だって子どもじゃない。聞き流せる。

しかし、この日に限っては風香は伊太郎には言っではいけないことを口にした。

「それにもう、やめれば？窓の外見ながらママを待つなんてさ。どうせ誰も迎えに何か来ないのよ。ここにいる人間には、本当の家族はね」

- 迎えにこない
- 本当の家族は

瞬間、伊太郎の頭に一気に血が昇った。

「何だよ！」

椅子を蹴倒し立ち上がる。両拳を握りしめ、伊太郎は唇を噛んで驚く風香を見つめた。

「何だよ。人が黙ってればさ。お前こそ知ったような口きくなよ。俺の何を知ってるって言うんだよ。ああ、そうさ、お前には来るあて何かないだろうな。真正銘の捨て子なんだからな。けどな、お前と俺と一緒にするな。俺にはちゃんと家族がいるんだ。いつか迎えに……」

「伊太郎君」

肩に誰かの手がのっているのに気が付き、伊太郎はそこでハタと我に返った。振り返ると、心配げに自分を見ている司の顔が傍にあり、施設中の冷たい視線が集まっていた。

それに気がついた時、伊太郎の頭がさっと冷えた。昇った血の気が同じ勢いで引いて行く。

こわごわ、足元の方に視線を泳がせる。泣くまい涙目で自分を睨む風香の顔があった。

「風……香？」

呼びかける。しかし、風香は一言も発さずそっぽを向いた。唇を突き出し、必死に充血した眼に溜まった涙を堪えている。

鳩尾に鋭いナイフが刺さったような痛みと呼吸の苦しさに伊太郎は黙りこんだ。

ヒリヒリとした白けた空気が伊太郎を責め立てる。

お前は、サイテーだと。

「どうかしたのかな？ちょっと、お茶でもしょうか」

そんな冷たい沈黙を破ったのは、温かな声だった。

振り向く。司が穏やかな笑みのまま伊太郎に手を差し出すような眼差しを投げかけていた。

いつもは嫌いなこの視線。しかし今に限ってはそれが有難かった。伊太郎は自分の発言に思いつき後悔しながらも、誰の視線も自分の視界に入れないように口の中で返事した。

「柳さん、すみません。続けてください」

「え、ええ」

司に声をかけられ、本読みを中断していたババアは再び何事もなかったように、続きを読みだした。

ようやく凍った時間が動き出し、冷たい視線も伊太郎から引き抜かれていく。

「伊太郎君。こっちに」

「はい」

司に背を支えられ、だみ声を後頭部に聞きながら、伊太郎は何とも言えない後味の悪さを感じていた。

それは施設中のひんしゆくを買ったことより、たった一人の人間の涙に起因する事は、伊太郎自身、嫌になるほどわかっていた。

## 告白 4

伊太郎が連れてこられたのは事務室の向かいにある応接室だった。四畳半ほどの小さな部屋には中庭に臨む窓と、対面した二人掛けのソファ、その間にあるテーブルと背の高い観葉植物しかない。

普段は主に入所する子どもの家族や、里親になる人間との面接に使われるのだ。

ここに入るのは二度目だな。

伊太郎は五年前の冬の日を思い出した。

まだ十歳だった伊太郎をここに連れて来たのは母親だった。始め、伊太郎はここがどういった場所で、自分にこれから何が起るのか全く分かっていなかった。

この椅子に座るまで、何の説明も受けなかった伊太郎は、ここで初めてこれからの事を知らされ、そして、そのまま置き去りにされたのだ。

顔を上げると今でもその時の母親の、固く氷のような横顔を思い出しそうで、伊太郎は膝の上に置いた自分の軽く握られた拳から目を離す事が出来ないでいた。

「ちよつとは落ち着いたかな？」

ドアが開き紅茶の香りと一緒に降って来た声に、伊太郎は下を向いたまま頷いた。

向かいに司が座る気配がし、甘い香りが湯気となって伊太郎の前に差し出される。

司は何も訊いてこない。

紅茶のカップを持ち上げる音がして、こちらが話したのを待っているのがわかった。とはいえ、この気配は押しつけても来ない種類のものだ。

だぶん、伊太郎がこのまま何も話さなくても、司は微笑んでこの部屋から送りだしてくれるのだろう。

そつと、視線をあげて司の方を窺ってみた。

司は優雅な所作で、紅茶の香りを楽しむようにカップを胸元まで上げ、外の景色を眺めていた。

伊太郎はつられてその景色を見てみる。

そこには大きな銀杏の木が見えた。まだ色づき始めたばかりだが、もう少し寒い季節に近づけば、それが見事な黄金に輝く事を、伊太郎は知っている。

「風香ちゃんね、ちょうどあの今、三輪車が止まっているあたりで見つかったらしいんだ」

「え」

銀杏の木の下に、誰かが忘れたままになっている小さな三輪車。

おいてけぼりのそれは、主人が迎えにくるのを待っているように見えた。

「僕は先代のオーナーから今のオーナーさんに変わった時期にここに入ったから、昔の事はよく知らないんだけど、彼女を見つけたシスターは天使がここに來たのだと思った、それくらい愛らしかったと言っているよ」

まるで子供におとぎ話を話すような柔らかな口調に、伊太郎はいつの間にか聞き入り、遠い日の風香の姿を見出すようにじつと目を凝らしてみた。

司の言いたい事はわかる気がした。

風香がいつも明るいのは、寂しさを紛らわせるためなんだ。親の顔も知らない、それどころか自分が何者なのかも分からない。それ

がどんなに心細く、息苦しいものなのか、きつとたつた十年とはいえ家族との思い出がある伊太郎にも、司にだってわかりはしないだろう。

風香は、誰にも理解できない孤独を抱えているのだ。

「伊太郎君のご両親は、本当はもう少し早くに君を迎えに来る約束だったんだよね」

「はい」

伊太郎はようやく司の目をまともに見た。司は手元のカップに唇を湿らせる程度に口をつけるとそれをおいて、両手を組んだ。

そう、伊太郎は自分の中で、自分はここに置き去りにされたのではない、一時預けられただけなのだと認識していた。

あの時、母は三年したら迎えに来ると言っていた。だから初めの三年はまだ平気だった。でも、約束の日に誰も来ず、もう二年経つ。

「君の気持ちもわかるよ。こちらでも連絡を待ってるところなんだ」

「連絡は」

「直接は……」

司は申し訳なさそうに首を横に振るが、伊太郎が暗い顔に沈む前にすぐに言葉を付け足した

「あ、でも、代理の人とはちゃんと取れてるから。そう、遠くない時期に必ずって」

「そう、ですか」

一年前、しびれを切らせて聞いた時も同じ答えだった。ただ、だからと言っても、騒ぐほど伊太郎も子どもじゃなかったし、何より今は気落ちが激しくそんな気になれなかった。

風香は、あのまま、泣いてしまったのだろうか。

口が悪いのはわかってる。でも、風香が自分を構う理由だって、本当はわかっているのだ。

「風香ちゃん、君が外ばかり見てるから、寂しかったんじゃないかな？」

「わかります」

いつまでも、同じ事にこだわって踏み出そうとしない自分を、きつと風香はもどかしく思っているのだ。きつと自分以上に気をもんでいるに違いない。

その時、中庭に誰かがやってくるのが見えた。

「あ」

風香だ。風香はいつもの明るい笑顔で誰かに何か言って、三輪車を指さしている。

そこに入所したばかりの女の子がべそをかきながらやって来た。どうやら三輪車を一緒に探していたようだ。

風香はしゃがんで少女の背中に腕を回すと、なだめるように何かを話していた。

## 告白 5

伊太郎は、口やかましいだけじゃない、風香のこんな顔だって知っている。

「読書会、終わったようですね」

司はそついうと立ち上がった。窓際まで歩き、少女と風香に手を振る。

二人は司に気が付き手を振り返してきた。

なんだか、その光景は、伊太郎から遠い世界の出来事のように思えた。

司の事は好きじゃない。でも、羨ましいなと思う。特に、風香とあんな風に笑い合えるのは。

風香がこちらに気が付き、笑顔を凍りつかせた。すぐに頬を染め、口を突き出しそっぽを向く。

まだ、怒っているのだ。当然だろうな、と伊太郎は素直に謝る事も出来ずに自分もそっぽを向く。

そんな二人のかけ橋になるように、司が声を上げた。

「そうだ。風香ちゃん、これから先代のオーナーの所に行くんですよね」

「あ、はい。そうですけど」

「伊太郎君も一緒に行つてはどうですか？」

「「はあ？」」

この時ばかりは風香と伊太郎の息はぴったり合い、司を両方から凝視する。

風香は毎日先代のオーナーの所に通っていた。脑梗塞で半身が麻痺になり、最近は物忘れも進んできているオーナーの所にだいたい3時から7時まで、夕食や風呂の世話に行っているのだ。

もちろん、仕事ではない。風香が勝手にやっている事なのだが、伊太郎が知る限り、先代オーナーが退院して来てから風香は、これを一日も欠かしたことはなかった。

「ね？」

出た。ごり押しの微笑みだ。

司の笑顔に、思わず風香と顔を見合わせる。風香もさすがに弱った顔をしていた。

司が窓からひらり、中庭にその長い足を踊らせ軽く飛んで出た。三輪車の少女の隣にしゃがみ、風香を上目で見つめ、またにこり。

「風香ちゃん、彼女は僕が皆の所に連れて行くから。ね？お願いするよ」

みるみる風香の顔が赤くなっていくのが、伊太郎の所からもはっきり見て取れた。これだから、嫌なのだ。

「はい。わかりました。司さんのお願いなら……」

蚊の鳴くような声で風香が承諾する。

断るわけないよな。伊太郎は思いつきり溜息をついて、耳まで赤くする風香を呆れて見つめた。

「伊太郎君、カップはそのままでもいいからね。じゃ、先代さんによ

ろしく」

司がそう言つて少女を連れて去っていく。

司に連れられた少女は嬉しそうに司に何かを話し、彼は頷く。ここではありふれた光景がそこにはあった。

残された二人は窓を挟んでその姿を見送った。

風が吹き、銀杏の木がそんな二人を笑うように揺れた。

風香は伊太郎を睨むと

「私、部屋に戻つて荷物とつたらずぐに出るから。ちんたらしてたら置いてくからね。自転車も用意してよ。じゃなきゃ、あんた、運動部みたい私に私の隣を走る事になるからね。あ、ちなみについてこれなくて迷子になつても、探しには行きませんから。いい？私が自転車出して、門の前に行くまでには用意しててよね」

そう、いつもの早口でまくし立てた。

伊太郎はホッとした。

そしてやっぱりこちらも「はいはい」と気だるげに、いつものように応たのだった。

ちよつと、本当にちよつとだけ、司に感謝しながら。

## 告白 6

元オーナーは宮治賢という、年はまだ初老に足をかけようと言うほどの牧師だった。

10年前までは奥さんも健在で、この二人を中心に施設の方を切り盛りしていた。仲のよい夫婦だったが、結婚したのが遅かったとかで、二人の間に子どもはなかった。

二人は常々「この施設の子どもたち皆が我が子だから」と気にする様子はなかった。

その奥さんがガンで亡くなった。発覚1年もしないうちに天に召されてしまった。あつという間だったと、その一年を知るものはそう言う。

それから宮治は、持ち前の明るさと前向きでひたむきな性格で施設をひっぱっていた。が、とうとう無理がたたり4年前、伊太郎が養護施設にきてちょうど一年がたとうとしていた冬の朝、倒れてしまった。

脳梗塞だった。

奇跡的に手術は成功し、左半身に麻痺が残るも聞き手の右手側の機能は残った。麻痺自体も予想されたものよりは軽く、訓練で、杖をついての近距離であれば歩行での移動も可能だし、嚥下や咀嚼などは問題なくなった。

しかし、この体で施設運営をしていくのは困難で、今は財源元の教会側にその運営を任せている状態だ。

噂によれば、ここ最近は物忘れや記憶障害が少し見られるようになって来ていて、それもこの病の後遺症なのかもしれないとの事だった。

伊太郎は自分より少し前に行く風香の髪が、海風になびくのを後ろからぼんやりと見つめていた。

宮治の家は施設の隣の町にある。自転車で行けば15分足らずの

場所だそうだ。伊太郎はまだ一度も行った事はなかった。

海沿いの国道を通った方が近いから、と馴れた道に行く風香はさっそうと自転車を漕いだ。彼女の背中ではペダルが踏み込まれる度にバックパックが左右に小さく揺れていた。

中に何が入っているのは分からなかったが、風香は大切そうにそれを扱っていた。

太陽からの陽射しを照り返す海の輝きが、伊太郎から見える風香の斜め後ろからのその顔に当たっていた。

まだ夏の名残のような日焼けしたその頬が柔らかさそうだな、と思った。

「風香、雨の日はどうしてるの？」

「レインコート着て走るよ。さすがに雪の日はバスで行くけどね」

「危なくないか？」

2車線といえど国道だ。大型のトラックの往来も多い。ガードレールもない人一人分、申し訳程度に引かれた白線の内側を走るのは危険な気がした。

しかし、風香はまっすぐ前を見たまま伊太郎を笑い飛ばした。

「ぜんっぜん。だって、伊太郎。私が事故ったとか、怪我したとか聞いた事ないでしょ？風香のふは不滅のふ！平気だって。伊太郎のいは陰険のいで決まりだろうけどね」

一言多いって。それなら風香のうは五月蠅いのうだ。

と、いうのは心の声で納めて置いてやった。さっきの事への罪悪感もあつたが、海風と光の中を風切って走る彼女は意外にもイケてたからだ。

その顔は、司に見せるものとは少し違う、まるで少し幼い女の子が公園にでも出かける時のような顔だった。

風香にとつては、赤子から自分を育てたオーナー夫妻は親のようなものだ。だから、こうやって誰に言われなくても、毎日毎日、宮治の元へ行くのだろう。

それは、恩返しというより風香の一種の甘えの形の様な気がした。風香はこうすることで、不安から守られているのかもしれない。

自分は孤独で生きて来たわけじゃない。

それをこうやって確認しに行くのだ。

司がもし、この事を伊太郎に悟らせるつもりで差し向けたのなら、彼は相当……。

「いけすかない野郎だ」

「なに？ 何か言った？」

「いや」

風香に伊太郎はとぼける。そして、いけすかない野郎とウザい風香の仲何か、絶対に取り持ってやるもんかと舌を出した。

宮治の家は平屋の古い一軒家だった。どこかで見たような、と伊太郎は風香に倣い自転車を玄関先に止めながら考える。

そして、思い当たる。日曜にやってる長寿アニメのあの家の作りによく似ているのだ。門をくぐると左手に庭へのびる道があるのまですいている。

伊太郎が庭の方を見ていると、風香が「庭には重清の家庭菜園があるんだよ。すごく美味しい野菜が出来るんだから。あ、そいうやもつすぐ……」とペラペラ話し始めた。

重清とは、宮治を世話する住み込みの男だ。養護施設出身で、教会の信者でもあるらしい。

伊太郎も数回しか彼を見た事はないが、ずんぐりむっくりの、熊のような体格で、無口で無愛想な男だった。少々飛躍すれば、司とは正反対の人種だ。

あの、不器用そうな男が、と伊太郎は思ったが、家政婦の仕事をこなすのであれば存外、器用なのかもしれない。

「こんにちは」

風香は庭の説明に飽きたのか、口をつぐむと無遠慮に引き戸を引いた。常に鍵は空いているらしく、引き戸は簡単に開く。

風香が大股で一步、玄関に踏み込んだ時だった。

「あ、れ？」

風香がそこで足を止め、足元を見つめた。

「どうした？」

「うん、お客さんみたい」

見ると、男物の革靴に低いヒールの女物のパンプスが並んでいた。

「宮じいは、今、革靴履かないから。重清はいつも草履だし。お客なんて珍しいな」

風香が首を捻った。

確かに、玄関にはもう一足マジックテープでとめられる介護用に靴があるだけだ。と、言う事は今は重清さんは出ていて、お客を宮

治さん一人で相手にしている事になる。

「重清、何してるのよ」

風香は舌打ちすると、我が家も同然の風で靴を脱ぎ散らかして家に入って行った。伊太郎は慌ててその後を追いかける。ただし、風香のように靴は脱ぎ捨てず、きちんと、風香の分までも靴を揃えてから、だが。

## 告白 7

家に入るとすぐ右手にある居間は通り過ぎ、風香は真っ直ぐに廊下を進んだ。伊太郎は一応通りざまに居間を軽く覗くが、やはり人はいない。

「たぶん、宮じいの部屋よ」

風香は宮治の事を宮じいと呼ぶ。もちろん愛嬌を込めた呼び名なのだが、この時ばかりは彼独りに客の相手を任せた重清に腹を立てているのか、やや乱暴な感じに聞えた。

「こんにちは！」

風香はあるふすまの前に立つと、一気にそれを引いた。

「風香か」

宮治の声がし、室内の空気が静かにこちらに流れるのを伊太郎は感じた。なにも、はなっから喧嘩腰でなくてもいいじゃないか。悪いのはここにいない重清さんなんだし。と、伊太郎は思いながら風香の後ろから室内を見た。

そこには庭に面した縁側におかれた、リクライニングチェアに腰かけた宮治と、その傍に一緒に庭を望むように籐の椅子に座る男女の姿があった。

三人の真ん中には小さなテーブルがあり、重清が用意して行ったのか、カップが三つと向かれた梨が置かれていた。

「これは、お孫様がいらっしやいましたか」

女性の方が、大人の女を思わせるやや低くそれでも透き通った声でこちらを振り返った。

黒目がちの瞳に長い首がたおやかな印象を与えている。地味なスーツを着てはいるが、それでもこの女性から匂いたつ色香は微塵もくすんでいないように思えた。

両手に手袋をしているのが少し気になったが、なによりもこれまで出会ったことのないような女性の魅力に、伊太郎は声が出せなかった。

「違います。私は宮じいの娘です」

その隣で風香がまだ警戒を解かずに女に突っかかるように言い放つ。

「あら、娘さん？」

女性が首を傾げた。瞬きする様は少女のようにあどけなくて不思議な感じがする。宮治は気分が良いのか低く笑い

「施設の子どもは、皆、私の子どもです」

と説明した。女は得心したようで声を漏らすと頷いた。

「風香と言います。宮じい、こちらは？重清はどこに行ってるの？宮じいにお客さんの相手一人でさせるなんてさ。何考えてるんだか。ここも開けっぱなしだし、そろそろ風が冷たくなるって言うの。宮じい、頭いつ切れるかわかんないんだから、不用意な事しないでよ」

「そう言う風に一気にまくし立てられる方が、血圧があがりそうだ

よ」

宮治はそういつて苦笑すると、伊太郎の方に視線を投げた。お客さんを紹介する前に、こちら側の人間を紹介する必要があると言っているようだ。

伊太郎は慌てて頭を下げた。

「あ、僕は伊太郎と言います。あの、僕も施設でお世話になってて」「貴方も」

伊太郎はその声を聞きながら、彼女達もあの豚ババアのように自分達を『可哀想』だとか思っているんだろうな、と苦々しい気持ちで顔を上げた。

「伊太郎君、風香さん、はじめまして」

しかし、顔をあげて見たのは、そんな事微塵も感じさせない目だった。何が違うかははっきりは分からない。ただ、憐れみと言ったものは一切彼女からも、その隣の男からも感じられず、むしろ、こう言った事情を知らない人間が普通に中学生を見つめる目と変わりはなかった。

「私も、はじめまして、になりますね」

ちょっと探るような口調でそう口を開いたのは、それまで黙っていた男の方だ。何かのスポーツをしていたのだろうか、体格が良く、座っているから正確には分からないが身長もありそうだった。

品のよい顔立ちは日本のものどこか異国の物が混在したような作りで、少々彫が深い。目の色も僅かにグレーがかって見える。そ

の目と同じように頭髮もグレーで後ろに撫でつけられていた。しかし、一番気になるのは、その耳だ。

前を向いている。それが妙に目について、一見ハンサムな部類に入りそうなその中年にアクセント的な愛嬌を添えていた。

風香もその耳に気が付いているらしく、デリカシーもなくその耳に凝視だ。

しかし、男の方はそんな視線を知ってか知らずか、穏やかで低い声で話を続ける。

「私は空知と申します。こちらの施設の今の運営元となる聖ペテロ教会の神父をしております。今日はオーナーさんに彼女の事を紹介しに来ました」

「天宮晴美と申します」

女性はそう自己紹介すると、二人に頭を軽く下げた。

## 告白 8

「晴美さんは普段は料理教室を開かれていますのですが、カウンセリングもされていましてね」

空知神父がそこまで説明して、大体的内容はわかった。

晴美という女性に施設内の子どものカウンセリング、心のケアを頼もうという事なのだろう。

それについては少し前から職員が考えていると聞いた事があつた。養護施設に来る子どもは、何かしらの事情を抱えている。そんな子ども達の中には酷く心に傷を負って入所してくるものも少なくない。

専門のスタッフが欲しい、というのは伊太郎にもわかりやすい話だと思った。

まあ、自分に必要かと訊かれたら断るだろうけど。見ず知らずの人間に洗いざらい話して、スッキリするという感覚が分からなかったし、第一、こんな女性と二人きりにされたら、かえって悩みの種が増えてしまいそうで……。

「いたろー。やらしい顔してる」

「は？」

そんな事をぼんやり考えていると、いきなり横っ面を声で殴られた。自然、緩んだ顔になってしまっていたらしい。

伊太郎は我に返ると、冷たい視線の風香から逃げるように顔を赤くして俯いた。

原因の晴美さんはころころと笑っている。

「で、重清は？」

風香はそんな伊太郎に早々に見切りをつけたらしく、半身乗出すと宮治に問うた。その声にはまだ警戒の色があり、伊太郎はそこまで美人を敵視しなくてもいいのに……と伏せ目で風香の横顔をチラリと見上げた。

宮治はそんな好戦的な風香の口調を一笑すると、ふと、伊太郎の方に視線を投げた。

それは不思議な眼差しだった。懐かしさとも、珍しさとも違う。敢えて例えるのなら、可哀想がるあのババアの目に似ていた。

でも、同じなはずありえない。長年施設のオーナーとして運営に携わってきた彼が、そう言う風に子どもを見るなんてありえないはずだからだ。

とはいえ、伊太郎は宮治と過ごしたのは初めの一年だけ。彼の事をよく知るわけじゃない。世話になった恩を感じないわけではないが、懐かしいというほどの間柄でもない。

だからさした落胆もしないで済んだ。伊太郎はただただ居心地の悪さに苦笑し「お久しぶりです」と軽く頭を下げただけだ。

宮治は目を細めると、軽く頷いた。最近、物忘れが始まっていると聞く。もしかしたら、自分の事は覚えていなかっただけかもしれない。伊太郎はそう好意的に思いなおすことにした。

「重清は使いにやってるよ。お客様に出すお茶受けを切らしていいね」

「そんなら、私に言ってくれたら途中で買ってきたのに。だいたい重清が買ってお茶受けて、どうせいつもの福々堂のまんじゅうか羊羹でしょ？遠いじゃない。片道自転車でも20分はかかるし、お客さん、待たせる事になっちゃうでしょ？」

「そうだな。気がつかなかったよ。次からはお前に頼む事にしよう」

宮治は頷きながら客の二人に「すみませんね」と付け足した。二人は「いえ、おかまいなく」と無難に返す。

「そっぴや、風香、頼んでいたものは……」

宮治がふと気がついたように言葉を向けた。風香は唇を尖らせ、背負っていたバックパックを肩からおろし、中をまさぐる。

「持って来たよ。けど、宮じいさ、CDなんか聴けるの？」

「馬鹿言うな。それくらい造作ないわ」

風香はCDケースを取り出すと、客の二人の隣を通り抜け、宮治に差し出した。それは販売されているようなものではなく、ラベルも何もない真っ白なCDだった。

「これは？」

空知神父も不思議に思ったらしく首を傾げる。

風香はなぜか自慢げにその神父を振り返った。

「クラシックよ。うちの保育士さんがヴァイオリンで弾いてくれたの。毎週土曜にいつも聞かせてくれるんだけどさ、私、いつもそれ録音してて、宮じいに話したら、どうしても聞きたいって言うからさ、コピーしてあげたわけ。凄く綺麗な音色なんだから。これはもう、世界の宝ね。これが聴けると聴けないのとじゃ人生、3倍くらい幸福度が変わると思う」

## 告白 9

宮治はそんな好戦的な風香の口調を一笑すると、ふと、伊太郎の方に視線を投じた。

それは不思議な眼差しだった。懐かしさとも、珍しさとも違う。敢えて例えるのなら、可哀想がるあのババアの目に似ていた。

でも、同じなはずありえない。長年施設のオーナーとして運営に携わってきた彼が、そう言う風に子どもを見るなんてありえないはずだからだ。

とはいえ、伊太郎は宮治と過ごしたのは初めの一年だけ。彼の事をよく知るわけじゃない。世話になった恩を感じないわけではないが、懐かしいというほどの間柄でもない。

だからさした落胆もしないで済んだ。伊太郎はただただ居心地の悪さに苦笑し「お久しぶりです」と軽く頭を下げただけだ。

宮治は目を細めると、軽く頷いた。最近、物忘れが始まっていると聞く。もしかしたら、自分の事は覚えていなかったただけかもしれない。伊太郎はそう好意的に思いなおすことにした。

「重清は使いにやってるよ。お客様に出すお茶受けを切らしていてね」

「そんなら、私に言ってくれたら途中で買って来たのに。だいたい重清が買ってお茶受けて、どうせいつもの福々堂のまんじゅうか羊羹でしょ？遠いじゃない。片道自転車でも20分はかかるし、お客さん、待たせる事になっちゃうでしょ？」

「そうだな。気がつかなかったよ。次からはお前に頼む事にしよう」

宮治は頷きながら客の二人に「すみませんね」と付け足した。二

人は「いえ、おかまいなく」と無難に返す。

「そついや、風香、頼んでいたものは……」

宮治がふと気がついたように言葉を向けた。風香は唇を尖らせ、背負っていたバックパックを肩からおろし、中をまさぐる。

「持って来たよ。けど、宮じいさ、CDなんか聴けるの？」

「馬鹿言うな。それくらい造作ないわ」

風香はCDケースを取り出すと、客の二人の隣を通り抜け、宮治に差し出した。それは販売されているようなものではなく、ラベルも何もない真っ白なCDだった。

「これは？」

空知神父も不思議に思ったらしく首を傾げる。

風香はなぜか自慢げにその神父を振り返った。

「クラシックよ。うちの保育士さんがヴァイオリンで弾いてくれたの。毎週土曜にいつも聞かせてくれるんだけどさ、私、いつもそれ録音してて、宮じいに話したら、どうしても聞きたいって言うからさ、コピーしてあげたわけ。凄く綺麗な音色なんだから。これはもう、世界の宝ね。これが聴けると聴けないのじゃや人生、3倍くらい幸福度が変わると思う」

風香は本当に宮治さんが好きなんだな。

今日は、こんな風香が見られただけでも良かったかもしれない。うざい風香が少しだけ好きになれそ……。

そこで伊太郎は慌てて思考を強制終了した。  
好き？自分が、風香を？

「ありえないって」

思わず声に出る。

しかし、心臓が何かを勘違いしたのかその収縮を速めていた。馬鹿、違う。伊太郎は、言う事を気かない自身の体に向かってそう言う、俯いた。

「伊太郎君？」

肩に手を置いたままの晴美がそんな伊太郎を覗き込む。するとさらに心臓はアクセルを踏み込み、手がつけれなくなる。

なんだよ！もう！

伊太郎は口を固く結ぶと完全に俯いた。

「いたろゝ。やらしゝ」

「関係ないだろ！」

本当は大ありだが。伊太郎は怒ったように立ち上がると、風香の傍まで歩み寄り彼女の手を強引に握った。

「いいから、帰ろう。これ以上ここにいたら僕達邪魔だって。CD渡せたんだし、風呂とか飯は今日はいいって言ってるんだし、行くぜ！」

「けど！」

「いいから！」

伊太郎は一刻も早くこの状況から逃げ出したくて、風香の手を引っ張った。小柄な風香は簡単に伊太郎に引きずられる。

「ごめんなさいね。今度、施設でお会いしましょう」

「すみません。気をつけて」

「すまんかったな」

大人三人の声がそれぞれ子ども二人に投げられる。

「ちよつとお！」

まだ諦めない風香を引っ張りながら、伊太郎は部屋を出る前、三人の方をもう一度だけ見た。

宮治と目が合う。

やっぱり、宮治は自分を憐れみの目で見ていた。それに不快感がこみ上げ、眉を寄せる。

なんだ、元オーナーっていつでも、豚ばあと変わりねえんじゃねえか。それとも、約束を反故された俺がそんなに『可哀想』か？うつとおしい。

この視線は勘違いじゃない。そう確信した瞬間、もう、好意的にその視線を受け止められる事をできそうになくなった。

伊太郎はその視線を遮断するように頭を下げ、それを振り切るように風香とこの家を後にした。

「どうして素直に言う事なんか聞いちゃうわけよ。そんなにあのオバサンが気に入ったわけ？伊太郎の馬鹿！スケベ！エロおやじ！」

自転車を走らせながら前に行く伊太郎の後頭部に、遠慮や思いやりの欠片もない風香の悪口の矢が絶え間なく突き刺さる。

伊太郎は国道の道をようやく曲がり、一般の道に反れてから速度を落とし、風香の隣に並んだ。

「言いたい放題だな」

「そつちはしたい放題じゃないの」

「あの場はこうするしかなかったんだよ！」

伊太郎は鈍感なのか、空気をわざと読まないのか、はたまた身勝手なだけなのか、あの場で引こうとしなかった風香を軽く睨んだ。

「どついう事よ」

「お茶受け」

「へ？」

ちょうど目の前の信号が赤に変わる。伊太郎は少々乱れた息を整えながら、風香を改めてみた。

「重清さんに買いに行かせたって」

「うん。福々堂の羊羹でしょ。羊羹が何かまずいの？なに？羊羹が来る前に帰らないといけない理由でもあった？伊太郎、羊羹嫌いだったけ？でも、あそこの羊羹は……」

何回『羊羹』って言うんだ。伊太郎は心の中で突っ込みながら、話がそれるといけないので別の事を口にした。

「あつたんだ」

「へ？」

「福々堂の羊羹」

伊太郎があの時、台所の戸棚の中に見たのは、間違いない。福々堂の羊羹と饅頭の箱だった。中身のないものを戸棚の中にしまうとは思えない。もしかしたら宮治があるのを忘れていたのかもしれないが、もしそうでも重清は確認してから出るはずだ。なぜなら、買いに行くのなら往復40分もかかってしまうのだから。

と、言う事は、宮治は重清に確認せずに買いに行かせた。もしくは古いものをお客様に出せないと突っぱねたのかもしれない。どちらにしろ、重清にそう言った事を云いつけたのは……。

「宮治さん。三人だけで話しかつたんだ」

「あ」

だから人払いした。いつも身の周りの世話をする彼にすら聞かせたくない話なら、自分たちに入る余地何かないだろう。それに

「たぶん、話は運営の話だよ」

「へ？」

風香は不思議そうに伊太郎を見つめた。いつものお喋りな口が、一音で止まる。

信号が青に変わった。

伊太郎はペダルを漕ぎだしながら、自分の考えを告げる。

「あの二人、ちょっと変だったと思わない？特に神父の方」

「耳の形？」

「そういう意味じゃなくて」

確かに耳の形はおかしかったけど。伊太郎は空知神父の耳を思い出し小さく笑った。

「ずっと、宮治さんの事、オーナーって呼んでたんだ。運営の事も「今の」ってわざわざ断りをつけてた。親しい仲ならそんな呼び方しないだろうし。想像だけど……たぶん、まだオーナーの名義は宮治さんなんだよ。宮治さんの状況も芳しくない。継ぐような子どももない。運営をこのまま任せるのなら、運営の委託という形じゃなく、オーナーの名義ごと譲る形にしないかって話しに来たんだよ」

半分は勘の様なものだ。でもあの空気の感触は既知の間柄の人間の見舞いというより、ビジネスな感じだった。

もちろん、晴美の紹介も今日の訪問の目的の一つだったんだろうけど、それはどちらかというとオマケなような気がした。メインがそちらなら、今の施設の状況を簡単にでも自分達から聞き出しても

良いようなものだ。

もう一つ、足せば、この訪問が突然だったというのも推測される。以前からのものならきつと風香に連絡していただろう。

「なによ！だったら、ますます見張ってなきゃ！私、やっぱり戻る！」

「よせよ。そんなの僕達が口出すことじゃないだろう？」

「でも！今、宮じいは……」

風香はその先を言いかけて口を噤んだ。

噤んだ訳が伊太郎にはわかって、そこをつつくような事は憚られた。

風香は心配しているのだ。宮治の痴呆を。でも、そのことで彼が一人の大人として正確な判断ができないと、不用意に断言できるほど彼女は強くも無神経でもない。

「任せようよ。重清さんをお使いにやるくらいなんだ。宮治さんにだって考えはあるだろうし、きつと、僕達のような子どもが傍にいても、きつと宮治さんを……」

「わかってる」

風香はそれきり黙ってしまった。

彼女自身、彼女の宮治を見る目の変化に気が付き、傷ついているようだった。

尊敬と敬愛。そして感謝。そんな気持ちで始めたはずの身の回りの世話は、少しずつその形を変えていたのだ。

それは悪いことではないと伊太郎は思う。仕方のない部類の問題

だ。

でも、きっと、風香には許せない事なのだろう。特に、これまで周囲に『可哀想』のレッテルを張られ見下されてきた彼女にとっては。

だから伊太郎もそれ以上口を開けなかった。

陽は傾きはじめ、もう、西の空が赤く染まり始めようとしている。それは今、隣をゆく風香の頬の色と同じ色をしていた。

## 告白 11

施設に戻る頃には空はずいぶんその色を赤く染めていた。

この季節は斜めに差し込む西日も優しい。伊太郎は小さな子供たちが遊ぶ中庭を風香と自転車で抜け、施設の裏にある駐輪場でもうやく地面に降りた。

中庭の方から、かくれんぼの掛け声がする。さっきの三輪車の少女が自転車の影に隠れながら「まーただよ」と答えていた。

もう、この子はここに馴染んだんだな。

伊太郎は嬉しいような、羨ましいような複雑な気持ちでその子の小さな背中を見つめた。

自分は五年もここにいて、まだ馴染んだ気はしない。と、いうより馴染みたくないのだ。馴染んでしまえば、迎えを諦める事に、約束を信じてない事になってしまいそうだから。

自分は他の連中とは違う。

その意識がここの人間を遠ざけても、そうでないと待つ事に耐えられなくなるんじゃないかって怖いのだ。

昔は他の連中も風香のように何かとこんな伊太郎でもかまっていた。しかしそれも昨日まで同室にいた奴を含め、いつまでも伊太郎が線引を止めないのを悟ると、自然に離れて行ってしまった。

そして五年経った今では、伊太郎の居場所はある窓際しかなくなつたのだ。

「伊太郎。私、司さんの所に行くから」

なんだ、帰ってきてすぐかよ。

唯一自分にまわりつく風香が、帰ってきてそうそう司の所に向かおうとするので、伊太郎は眉間にしわを作りスタンドを思い切り蹴り上げる。

「何だよ。さっきの事、話すのか？」

「うん、それもあるけどね、いつもこうしてるんだ」

「は？」

風香は伊太郎の視線など気にもとめていない。心はすでに司の方に飛んで言っているようで、窓ガラスに映る自分の影を見ながら乱れた髪を直していた。

「これも立派なボランティア活動だから、宮じいの様子も知りたいし、帰ってきたら司さんに宮じいの様子を報告する事になってんの。言葉の様子はどうだったか、物忘れは進んでなかったか、今日一日どんな事をしてどこに行っていたのかとか、あと何をどれくらい食べたのか、トイレの状況までね」

そんな面倒な事をしていたのか。伊太郎はその意味を考えながら、両手をトレーナーのポケットにつっこんだ。

司が宮治と見識があるのかどうかは知らないが、健康管理を兼ねているって事だろうか。中学までしか出ていない武骨な重清にも、お調子者の風香にも健康管理を、と言っても難しい。

だから司は観察ポイントを風香に伝え、それを報告させているのかもしれない。

でも、なにかが不自然だ。

伊太郎は首をひねって考えた。でも、何がどう不自然なのかわからない。ボランティア日誌はここに来るボランティア皆がつけるし、職員がオーナーの心配するのも特に変わってはいないのだが。

「じゃ」

言葉少ない風香の目には、もう司が映っているのかもしれない。でも、今ばかりは彼女を一人で行かせるのもどうかと思い、伊太郎はその背中に声をかけた。

「待てよ。僕と一緒に行くよ」

「どうして。はっきり言って邪魔なんですけど」

「はっきり言いすぎ」

不満をあらわにする風香に伊太郎は肩を並べると

「今日は一応僕も一緒につて事だったからね。それに、あの状況を風香が正確に伝えられるとは思えない」

「何よ。人を馬鹿みたいに。私だってそれくらいできますよ。あれでしょ。耳が小人みたいな神父と、無駄にフェロモンまき散らす胡散臭い女の二人組が、施設を乗っ取りに来てたって、そう言えばいいんですよ」

「……」

やっぱり風香にはそう言う風に聞こえていたのか。伊太郎は頭を抱えると自分の判断は正しかったのを確信した。

「一緒に行くよ」

「え〜」

風香の不満はこの際無視だ。乗っ取りなんて不穏な事ではないだろうとしても、運営にかかわる事なら職員である司の耳に入れておいた方がいい。ただし、正確に。

伊太郎は再び後頭部に風香の容赦ない誹謗中傷を受けながら、それは無視して事務室の方へと急いだ。

## 告白 12

養護施設の仕事と一口に言っても、それは多岐にわたる。ここのように運営状況が決して良いとは言えないん施設では、職員が二役も三役もこなさねばならない事もある。

ここの職員は司を除くそのほとんどがシスターだった。なので、彼女達は教会の方の仕事もある。宮治が以前やっていた経理などの事務は、いつの間にか司の役目になっていた。

司はキーボードを打つ手を止めて、少々疲れた目をいたわるように目頭を人差指と親指の腹で揉んだ。

紅茶でも入れて少し休憩しようか、腰を上げかけ外を見る。

Ｌ字型のこの建物の南側にある部屋は、皆、窓から中庭が臨めるようになっていた。

小さく開けた窓の隙間から子ども達のあどけない声が聞こえ、司は目を細める。

自分が彼らの様な年の頃はあやつて無邪気に遊んだ事がなかった。毎日毎日、彼の傍らにあったのは。

視線を足元に移す。

そこにはバイオリンのケース。黒いその曲線は見慣れたもので、これとの付き合いはきつと何よりも長い。

「今日は歌わせてやれなかったな」

週に一度だけの演奏会。バイオリンを手にするのはもう、その時だけと決めていた。忙しいのもあるし、それ以上にこの黒い塊には複雑な想いがあったからだ。

司は小さく嘆息し、今度こそ立ち上がった時だった。

事務室のドアが自分を呼んだ。

司は首を巡らせ声をかけると、伊太郎の声がした。

あれ？今日は宮治の所にやったはずだが？

さつきストレスを爆発させた少年のを思い出す。伊太郎が少々特別な事情を抱えている事は知っていた。だから、他の子どもより気にはしていたし、今日はあえて宮治の所にやったのに。

「どうぞ」

「失礼します」

開けられたドアの向こうには風香もいた。

司は首をかしげ時計を見る。まだ五時前。いつもより二時間は早い帰宅だ。

「あ、一応言っただけです。宮治さんのところ」

伊太郎が司の視線に気が付きそう説明した。

司はこの少年がもとも聡い子だというのは知っていた。よく、頭が回る。それゆえの苦悩もあるのだろうが、今は彼のその観察力と理解力が司には必要だった。

「そうですか。とりあえず、お疲れ様。おかえりなさい。僕も今、休憩しようと思っていたところなんです。芸がありませんが、よかったら向こうでお茶でもしませんか？」

「はい！」

伊太郎の代わりに元気に返事したのは風香の方だ。司は口元に笑みをこぼすと、二人を事務所の隅にある職員の休憩用のソファに座るように促した。

二人はそそくさとそこに腰かける。

伊太郎の表情はいつも以上に固く、風香の頬もいつもより赤かった。

何かあったんだな。

司はそう察すると、それ以上の詮索は先入観になると自制し、紅茶を入れに二人の元を離れた。

司の入れた紅茶は少々甘めのミルクティーだ。風香はこれが好きなのだが、伊太郎も文句言わずに口をつけていたので、さっきだったストレートの紅茶よりはこちらの方が良かったかな？と司は考えながら自分のカップに口をつけた。

二人は交互に口を開き、彼らが宮治の家であつた客について、そして宮治の様子について語ってくれた。

風香は少々感情的に、伊太郎は少々皮肉っぽくではあるが、二人とも事実をなるべく正確に司に伝えようとしている努力は窺われる口調だった。

二人の話を聞いた、司はしばし押し黙った。

宮治の家に訪問者。しかも人払いまでする内容か。

内容が何なのかと推測を巡らせる。伊太郎の見立てでは運営の話ではないかと言うが、宮治をオーナーと呼んでいただけではその確証は持てない。ただ、宮治がまだこの施設のオーナーであることを知る人間もそう多くないのは事実だ。

やはり、伊太郎と一緒に行かせて正解だったな。

司は紅茶に口をつける伊太郎をそつと見た。

彼の特別な事情は、彼に浅からぬ影を落としている。もしかしたら、宮治に関わることで、それが払われるかもしれない。もちろん、より深まる危険性も同じくらいあるのだけれど。

「どう、思います？空知神父なんて聞いたことがありますか？」

心配しているのだろう。風香が身を乗り出して助けを求めるように司に詰め寄った。彼女は宮治の『娘』の様なものだ。心配して当

然か。

「名前は。お会いした事はありませんが、教会の関係者の名簿にはいつもありますよ。こちらについてはシスターの方がお詳しいでしょうけど。そうですね、確かに、少々心配ではありますね」

「でしょ！特に、晴美って女。胡散臭くて。施設何かに入れたくない感じ。あんなの来たら風紀が乱れるっての」

いつもより口数が多いのは、よほどその女性が気に食わなかったのだろ。伊太郎がその女性をみてばんやりでもしたのかな？

断言する風香と、彼女を呆れ顔で見つめる伊太郎を、素直な事は美徳だな、と彼らを司は交互に見比べた。

微笑ましい二人だと、いつも思う。

「いいでしょ。今日の帰り、シスターと宮治さんのお宅に伺ってみます。運営にかかわる事なら知っておきたいですし、少なくともそのカウンセラーさんの事は耳にぐらい入れておきたいですからね」

「こちらにはそういった連絡は」

「まだ」

伊太郎の視線に応えてやる。伊太郎は司の答えにまた、思案を巡らせ始めたようだ。

彼は、使える。今後も関わってもらおう。

司はそう判断すると、会話を切り上げる事にした。

「貴重なお話ありがとう。じゃ、僕はそろそろ仕事の続きにもどりますね。君たちはもうすぐ夕飯の時間じゃないかな」

「あ、そうですね。お邪魔しました」

伊太郎が頭を下げ、風香もそれに倣う。

三人が席を立つとちょうど夕食の匂いが漂ってきた。今日は、焼き魚と味噌汁だったな。食べられないのが残念だ。

司はそう思いながら、カップを盆の上に片付けた。

伊太郎はその夜、なかなか眠る事が出来なかった。

もともと気になると考え込んでしまふ性分だ、次いで今日から一人部屋で、やはり落ち着かないというのもあった。

消灯を過ぎてからの外出は基本的に禁じられているので、ふらつと散歩と言うわけにもいかないし、談話室で時間を潰しにしてもテレビは原則見る事は出来ないし……結局、こうやって部屋でごろごろしているしかないのだ。

二段ベッドの下は誰かの下敷きになっているようで気分は良くない。天井が他人の床なのだ。

でも、前にここにいた奴は頑として上を譲ってくれなかったから、伊太郎は彼と同室になつてからずっと下で寝ていた。

もう、空になっているのだから上に寝てもいい気はしたが、それも今更面倒だ。

そう、今更なんだ。

いつもああやって、窓際で迎えを待っている。でも、今更母親が迎えに来たところで、自分はどんな顔をすればいいのだろう。

なぜ、ここに預けられたのかの理由もはつきりしない。約束の期限は2年も過ぎている。ともすれば、置き去りに……いや、捨てられたんじゃないかという疑念が、この二段ベッドの天井のように迫つて来て自分を押し潰しそうになる。

風香は、どうなんだろう？

自分を捨てた親を、恨んでいるのだろうか？

それとも、もし、迎えに来たら、宮治さんの事は置いてでも本当の家族の元に行くのだろうか？

わからなかった。

昼間見た、風香のあの表情は心から宮治を慕い、心配するものでそれは顔も知らない親なんかより、ずっと強い絆を持っているよう

な感じがした。

でも、現実では綺麗な風景は往々にして裏切られる。

募金は横流しされ、福祉は食い物にされ、愛護動物は飽きたら捨てられ、ボランティアは可哀想がりに来る。

風香も、やはり血のつながった家族が欲しいんじゃないだろうか？  
世話になったとはいえ、ボケかけて、体も不自由な老人の世話を一生続ける事なんかできるのだろうか？

僕ならしないな。

宮治の家で見た神父や美人の事を思い浮かべる。

彼らの事も面倒なら、やっぱり関わりは持ちたくない。

自分一人のことで精一杯だ。

伊太郎は目を閉じた。

眠りはまだ遠く、静かで他人行儀な冷たい夜だった。

その静寂を、いきなり破る音がした。

「伊太郎！」

伊太郎は開け放たれたドアと同時に飛び込んできた声に驚き、ネジ巻き人形のように飛びあがる。

そこには薄暗い廊下の光を背にした風香が、部屋着のまま立っていた。

「何？は？なに？」

時計を見上げる。いつの間には時計の針は夜中の一時まで進んでいた。

「伊太郎！大変！宮じいが、宮じいが……」

風香は酷く動揺しているようだった。せわしなく視線を泳がせ、不安げな手は自身の腕をきつく掴んでいる。

伊太郎はベッドから出ると、風香の顔を覗き込んだ。

「どうした？宮治さんがどうかしたの？夢でも見た？」

しかし風香は首を振ると、涙をこらえきれなくなったその瞳を一度ぎゅっと瞑ってから、伊太郎をじっと見た。

「どうしよう。どうしよう。ねえ、伊太郎。どうしたらいい？」

わななく唇からは同じ言葉しか出てこない。伊太郎はもどかしくなつて風香の両肩を掴むと、じつとその双眸を自分に固定させるように見つめた。

「しっかりしろよ。まずは落ち着け。宮治さんが、どうしたんだ？」

わざと低く、強く、ゆっくりとした口調で尋ねる。風香は真つ青はその顔に充血した目で一度唇を噛むと、うわ言のように口を開いた。

## 告白 14

「宮じい。病院に運ばれたって。し……し……死んじゃ……」

「わかった」

伊太郎はみなまで言えない風香の気持ちに、自分の胸までも痛むのを感じ、彼女を抱きしめかけた。が、一歩手前でその手を止めた。自分がそうしていいかわからなかったし、何より……。

「風香ちゃん。伊太郎君」

風香の向こうに司が駆け寄ってくるのが見えたからだ。

司も少し動揺しているらしく、少々長めの髪が乱れている。

「シスターが物音を聞いたから、もしかして風香ちゃん、聞いたのかと思って」

「ごめんなさい」

風香は振り返ると、まだ不安げに胸の前で手を組み震えていた。

司はそんな風香に、底なしに優しい笑みを向けると、なんら躊躇なく彼女に手を伸ばし、抱きしめた。

伊太郎の胸が、さつきと違う痛みを覚える。が、司に身を任せる風香の背中を黙ってじっと見つめた。

そうだ、この役目は、自分じゃない。司のが風香にはいいはずだ。そう、言い聞かせ、後ろ手に拳を握りしめる。

そして、ようやく出せた声は

「どういう事ですか？」

状況を冷静に把握、分析する事で感情を消し去ろうとするいつもの自分の声だった。

司は風香の背をなだめるようにさすりながら、いつもの冷静さを取り戻したのか、穏やかな声で答えた。若干いつもより声を落としているのは、もうとづくに就寝時間を過ぎているからだろう。

「僕もさつき、戻って来たところなんです。今日の当直のシスターと事務所で話をしていたら、廊下で物音がして、シスターが風香ちゃんの後姿が見えたというので」

それで風香を探していたわけか。

風香はまだ不安をこらえきれないらしくて、小さく震えている。司は今度は風香に言い聞かせるように、さらに声を柔らかくした。

「心配で、眠れなかったんだね」

「うん。起きてたら自転車の音がして、気になって、そしたら、司さんが……」

司の腕の中に包まれた風香の声は、伊太郎には聞きづらかった。と、いうより聞きたくもなかったのかもしれない。

こんな事に巻き込むなよ。舌打ちしたくなるのをぐっと抑えて。

伊太郎は努めて風香を視界に入れないようにしながら司を見た。

「で、何があっただんですか？」

「うん。ほら、今日、僕とシスターで宮司さんのお宅に伺う事にしてたじゃないですか。それで6時頃にシスター三綾と向かったんで

す。そしたらお宅の前に救急車が停まっ

司の話だと、司とシスターが駆けつけたのは、重清が呼んだ救急車がちょうど到着した所だったらしい。

重清の話によれば、帰ってくると、客の二人の姿はなく、宮治はあのロッキングチェアで意識を失っていたそう

「やっぱり！ やっぱりアイツら！」

声を上げる風香に、司が首をゆるゆると振る。

「心配なのはわかるけど、むやみに疑っちゃ駄目だよ。風香ちゃん。そのお客さんが帰られた後に体調がおかしくなったのかもしれない」

それは、そう

「で、宮治さんの容体は？」

「うん。正直、あまり樂觀はできそうにもないんだ。脳出血を起されててね、今、緊急オペをされているんだ」

「そんな」

風香は僅かに司から身を話すと、愕然とした顔で司を見上げた。まるで彼に救いの言葉を求めているかのような眼差しだ。しかし、残念ながらここに

## 告白 15

司は言葉の代わりに風香の頭を撫でると

「今、僕達にできるのは回復を信じて祈るしかないよ。きっと大丈夫。だから、今夜は……」

「そんなの、わからないじゃない！」

風香が声を上げた。伊太郎は驚いてその横顔を見つめる。いつもは司の前ではまともに話せない風香が、今は彼に突っかかっていた。司の胸元をつかみ、必死に訴える。

「宮じい、もういい年なんだよ？ 体力だつてあるわけじゃないんだよ？ 夕方、あんなに元気に話してたのに。持って行ったCDだつて、嬉しそうに受け取ってくれたのに。それなのに……」

「CD？」

司が首を傾げる。彼は自分の演奏が録音されているのを知らないらしい。伊太郎はそれについて口を挟もうとした。

が、風香の声がそれを遮る。

「司さん。病院に連れて行って！ ううん。私一人でも行くから。どこの病院か教えて！」

「風香ちゃん」

困ったように司が眉を下げる。でも、口をへ字にした風香はも

う、その考えから一步も動こうとはしなかった。

強い意志の宿るその瞳で、司を見つめる。

きつと、ここで司が首を縦に振らなければ、こんな時間でも彼女は飛び出して行って闇雲に探すんだろう。そんな凄みがあった。

面倒な事は関わり合いたくない。でも……。

風香の真剣な横顔を見つめる。風香は真つ先に自分を頼って来てくれた。その気持ちくらいには応えても、いいかもしれない。

「司さん。僕からもお願いします」

気がついたら、伊太郎は自分でも驚くほど揺るぎない声で司にそう進言していた。司の目が僅かに見開かれるが、すぐに笑みに細められると、降参といった風に両手を上げた。

「わかりました。僕も同行していいのなら……。ただし、宮治さんには会えないかもしれませんよ」

「かまいません！」

「じゃ、タクシーを呼びましょう。君たちはしたくして、玄関方で待っていて下さい」

司は二人にそう言い残すと、暗い廊下を事務所の方へと姿を消した。

伊太郎はその背中がすっかり見えなくなってから、そっと風香の方を見てみた。風香は弱り切ったその顔で、あやふやな笑みを伊太郎に向けていた。

「ごめんね。巻き込んだじゃって。でも、ありがとう」

「な、なにらしくないこと言ってるだよ」

風香に礼なんて言われた事のない伊太郎は、あまりに素直な風香のその言葉にどう反応すればいいのか混乱し、思わずいつものように悪態で返した。

そらしてしまった視界には、風香の表情は見えない。でも、彼女の元気がないのは確かだ。

かといって、やっぱり司の様な支えにはなれないし、導いてやる事も出来ない。それどころか自分には、やってやれることなんかほとんどない。

できるのはきつと。伊太郎は口を尖らせると少々口ごもりながら言葉を付け足した。

「風香のふは不滅のふなんだろ？　しっかりしろよ」

自分にできる事。それはきつとこうやって軽口を叩くだけだ。それでも、空気が僅かに解けたのは肌に感じられた。

顔をあげると、さっきより明るい笑顔で風香が涙をぬぐっていた。

「そうだよ。うん。そうだ。風香ちゃんのふは不滅のふ。だよ。伊太郎にしてはいいこと言うじゃん。伊太郎のいは陰険じゃなくて『いい奴』のいに昇格してあげるよ。あ、でも、今夜だけね」

「そりやどうも」

そんなのどっちでもいいよ。そう思いながら、伊太郎はどこかホッとして肩をすくめた。風香の涙をこうも立て続けに見るなんて、こりこり。もうこれ以上は見たくもない。風香がこんなじゃ、こっちまで調子がくるってしまいそうだ。

「じゃ、また後でな」

「うん」

風香が跳ねるように自分の部屋に戻ってくる。

細い肩で髪が弾んでいる。柔らかそうな部屋着の裾がひらひらと蝶のように揺れていた。

いい奴……か。なんか、微妙だな。

伊太郎は苦笑すると、自分も支度をするために部屋に戻った。

深夜の街を抜け、タクシーで着いたのは町で一番大きな総合病院だった。元々の通院先もここで、救急で運ばれた先が同じなのはこのご時世だと運のいい方だと司は話してくれた。

病院についてすぐに三人はオペ室の傍にある家族用の待機室に向かった。今は重清が詰めているとの事だ。

ふと、伊太郎は他に家族がいないのだろうかと思っただが、それを口に出すのは憚られた。

半身麻痺になっても、他人の風香や重清が面倒を見るような状況なのだ。子どもはいないと聞く。他の親類とも宮治は縁が薄いのかもしれない。

冷たい廊下に、非常口を示す緑色の光がポツンポツンと伸びていた。夜の病院と言っても薄気味悪いとは思わないが、隣をゆく風香のその表情は気になって仕方なかった。

部屋の前で笑顔を少し見せた彼女だったが、やはりその顔にいつもの生気はない。タクシーの中も、ここについてからもずっとその口は真一文字に結ばれたままだ。きっと、何かを言い出せば、溢れてくる不安のように言葉が止まらなくなるのだろうな。そんな気配が降り出す前の雨雲の様な彼女の表情から見て取れた。

もう、泣くなよ。頼むから。

伊太郎は心の中で呟くと、前に行く司の背中を見つめながら、彼がタクシーのなかで答えてくれたいくつかの事を整理した。

状況で確かなのは、宮治が意識を失くし倒れ、客がいなくなっていた。その事だ。

この二人とはまだ連絡を取れていないらしいから、彼らがいつあの家を後にしたのかはわからない。

まあ、宮治の様態の方が優先になるのは納得できたし、今回運ば

れたのは脳内出血によるもの。別に外傷性じゃない限りは、簡単には事件性なんて考えられない。

前回は脳梗塞で、今回は脳出血か。

伊太郎は自分の中にある知識の引き出しをかき回す。

確か、似ているようで全く違った病気の筈だ。簡単に言えば前者は何かが血管に詰まりその領域野が虚血に陥って障害をきたす。一方後者は、血管が損傷し、文字通り出血し障害を起こすものだ。

ただ、関連はなくてもない。宮治はもしかしたら高血圧だったのかもしれない。前回の梗塞がアテローム型、つまり動脈硬化によるものなら、血管がもろく出血しやすい状態だったのかもしれない。

ま、詳しくは分からないけど。どちらにしろ、風香が疑うようにお客の二人になにか過失があるとは考えにくい。

伊太郎は肩をすくめると、ようやく少し明るい場所を目にして少しほっとした。この先がオペ室と示すような銀色の扉の隣のドアの前で司が立ち止まる。

ノックすると、少々間が空き、遅いテンポの間延びした返事が返ってきた。

重清の声だった。

「今晚は。ご苦労さまです」

部屋は六畳ほどで、仮眠が取れそうなソファが二脚と古い形のテレビしか置かれていなかった。窓はブラインドを下ろされ、外の景色までは分からない。

重清はそのソファの一つで仮眠中だったらしく、右手のそれには病院のものだろうか、薄い毛布がくしゃくしゃに置かれていた。

出て来た重清は、無精ひげを生やし、よれよれのシャツを着ていた。まさに着のみ着のままといった体だ。大きな平べったい顔に小さな目。やや黒ずんだ肌。熊の様な……そんな比喻は彼の為にある

ように感じられた。

「ど、ど、ど」

重清は緊張すると吃音になる。話し始めも大抵そうなんだそう。何度か施設で見た時も、彼はどもっていて伊太郎は彼とまともに話した覚えはない。

大きな節くれた手で、重清は困ったようにその短く刈り込まれた頭を何度もガシガシと撫でまわした。

司はそんな重清に微笑むと、差し入れなのだろう、施設から持ってきていた紙袋を差し出した。

「シスターからの差し入れです。すみません、突然押し掛けて」

「い、い、いや。いい。座れ」

重清は差し出された紙袋をひったくるように受け取ると、すぐに俯き背を向けた。怒っているのか？と伊太郎は司の方を見るが。司は微笑んで首を横に振るだけだ。

きつと、これがいつもの重清なのだろう。

三人は、毛布をその武骨な手で丁寧に畳む重清の向かいにあるソファに、並んで座った。

重清の人みしりは重症なのだと風香が話していたのを思い出した。子どもの頃からの吃音でよくいじめにもあっていた。施設でも馴染むことはなく、一人で過ごす事がほとんど。誰かと一緒なのは教会に通う時くらいだそう。

そんな重清に里親どころか、年齢に達しても就職先が簡単に見つかるはずはなく、宮治が引き取るような形でその家に住みこむようになったという。

風香が8つの時に重清は18だったというから、ちょうど年齢は

司と同じ25という事になるが、見た目はそれよりずっと上に見えるた。

もし、重清を知らない人間が見れば、彼に中学生の子どもがいると言っても信じるだろう。

売れっ子モデルの様な司に、冬眠から目覚めたばかりの熊の様な重清。

同じ人種にはやっぱり見えないな。

司と重清を見比べ、伊太郎はぼんやりそんな事を考えた。

## 告白 17

「何かあれから連絡はありましたか？」

司が彼の背中に声をかける。重清は黙って首を横に振って、ようやくソファに腰をおろした。

「なにも。でも、そ、そ、それは……」

「ええ。悪いことじゃないですよ」

先に言い含めていたのだろうか、司は重清にそう言葉を添えると彼を落ち着かせるように口を開いた。

「早くても遅くても心配ですが、お医者様は6時頃まではかかるとおっしゃってた。まだ待っていていい時間です。重清さんは僕たちがここに來たから驚かれていますね？」

子どもに話すように言葉が選ばれている。伊太郎はそう感じて黙って聞いていた。それは実際、司の意識していないところでの重清を見下す態度にあたるのか、それとも重清には知能障害でもあるのか、伊太郎は知らなかったからだ。

重清の方も気分を悪くした様子はなく、素直に司の言葉に頷いている。そのやり取りには信頼感のようなものすら感じとれた。

それから重清は、司に向ける視線とは対照的な、まさに動物園の折の中の熊の様な、警戒と不信を混ぜたような訝しんだ目を、伊太郎と風香の間につろつろ彷徨させた。

司は眉を下げると、重清に見せるように風香の方に視線を向ける。風香はここに来てからもまだ何も話していない。俯き、膝の上で

両手を組んだまま、彫像のように動かないでいた。

「彼らが心配だと言うので。他の意味はないですよ」

「あ、ああ」

重清が呻くような声で頷いた。それから唇をいろんな形に変えてから「し、心配するな。まかせろ」と彼なりの風香への優しさを口にした。

それから風香をなんとか元気づけようとしているのだろう、重清はそのそり立ち上がると、差し入れをこそごとと風香の前に並べ「食べ。食べ」と繰り返した。

伊太郎は首を傾げる。

重清が家に戻った時、宮治が倒れていた。

もう、客はそこにはいなかった。

そして司とシスターが駆けつけた時には、救急車が着いたところだった。

本当に、これは事実なのか？

昼間感じた違和感と相まって、スツキリ飲みくだせない正体不明のなにかに、伊太郎は軽く唇を噛んだ。

そのまま、さした会話もなく、4人はそのまま転寝するように時間を過ごした。はじめに重清がいびきをかきだして司がそれを寝かせた。伊太郎も、重清の次に風香が船をこぎ出したのまでは意識があったが、いつの間にか頭の内側に粘着質な飴をコーティングするような性質の悪い眠気に掴まり、そのまま夢の中へと落ちて行ってしまった。

夢は、酷く苦しいものだった。

やるせなさとしみじみ、そして焦りをごちゃまぜにした感情の深みの中に放り込まれたような、そんな夢だった。

夢の中で伊太郎は、可哀想がる、ババアや宮治の目にさらされていた。隠れようと逃げても、その視線は逃がしてくれない。ようやく辿りついた風香の部屋は空っぽで、呆然としてしていると母親の声がした。

振り返ると誰かがそこに立っていた。

でも、顔が見えない。

そして、伊太郎自身気がつくのだ。

自分はもう、母親の顔を忘れ始めている事に。

肌寒さに伊太郎は目を覚ました。体に僅かな重みを感じて首を廻らせると、風香が自分の肩に寄りかかって寝ているのが見えた。どうやら自分達二人はソファに寄りかかるように座ったまま眠ってしまったらしい。

二人に、重清と同じラクダ色の毛布が掛けられていた。

ふと、鼻先を甘い香りがくすぐった。

すぐにそれが風香の髪の毛の香りだと気が付き、伊太郎は夢とは違う苦しさには彼女の体を突き放すようにうかせた。

離れた間に冷気が入り込む。彼女の温もりを惜しむように肌が震えたが、このまましていると身動きは取れないし、何より……。

心臓が寝起きにしては駆け足している。

寝覚めが悪くなる。

伊太郎は顔をしかめるとそっと、風香を起こさないように身をずらしながらソファを離れ、風香を寝かせた。

幸い、風香は僅かに声を漏らしただけで、起きはしなかった。きつと、精神的な消耗が激しかったのだらう。眠りは深いように見えた。

## 告白 18

「さて。今、何時だ」

室内を見回す。そこで初めて司の姿がないのに気が付いた。

重清は変わらない姿勢で向かいのソファで高いびきをかいている。彼の太い腕に着いた時計は6時前をさしていた。

手術、終わったのか？伊太郎はそう思い、部屋を出た。しかし、薄暗い窓もない廊下には朝の気配も、何かが動いた気配もなく、ただただ静かだ。

司は、どこに行っただろう？

昨日一日の事を考える。

ボランティアに協力的な司。

宮治の様子を報告させる司。

様子を見に行くといっただけの司。

重清にイニシアティブをとっている風な司。

風香には悪いが、その司全てが伊太郎には引つかかっていた。

まだ、明確に疑いを持つほどのものはないし、何かが起こったわけじゃない。宮治の様態悪化はあくまで病的なものはずだ。

でも、何かが、伊太郎に警告していた。

これは偶然じゃない。と。

伊太郎は司がトイレにでも出かけている可能性を含み、探すことにした。まずは彼と話してみないと、この靄のような気持ちの悪さは払拭できないと思ったからだ。

廊下を歩き、途中にあった洗面所も覗いてみる。

しかし姿はない。

こんな売店も開いていない病院で、他に行くとしたら、ナースス

テーションか

「電話か？」

救急で運ばれそのまま手術になった宮治にはまだきまつた病室がない。医者に呼ばれ何らかの説明を受けているのなら探し様がないが、その可能性を除けば電話しかないように思われた。

電話はどこだ？

伊太郎は一番近く、階段のすぐ傍にあった案内板で、案外すぐ傍、自販機のある廊下の隙間のような場所にそれがあるのを確認した。

電話。だとしたら。誰に？

今、自分が考えられる、司の電話の相手はそう多くはない気がした。

しばらく進むと、自販機の灯りが漏れているのが見えた。耳を澄ませ、一步に気を遣う。

話声がした。

それは枯草がかすれるような小声で、内容までは分からない。

でも、司のそれである様な気がした。

やっぱり。

伊太郎は緊張しながら歩を進める。

何を話しているのだ？誰と？何のために？

疑問は尽きそうにはない。

すぐ傍までたどり着く。幸い会話はまだ途切れていない。煌々とする光から隠れるように、伊太郎はピタリと頬まで体をその冷たい壁に張りつかせた。

声の明度は先ほどよりは高くなり、この話声が司のものだというのは推測から確信に変わる。

「は……ええ。なん……権利書の方は……言状……では」

途切れ途切れに聞こえる単語に伊太郎の頬は固まった。ギクリと心臓が乱暴に握りしめられたような痛みと、呼吸もはばかられる緊張に自分の手でその口を塞ぐ。

司の言葉。それは少なくとも宮治の様態に関する内容ではない事は明確で、いや、むしろこれは……。

伊太郎は急速に、靄が晴れないまでも、その向こうの何かの形が確かなものに変わっていくのを感じた。

同時に余計な事に首を突っ込んでしまったかもしれないと、後悔の色が濃くなっていく。

「でき……急ぎます。では」

受話器が置かれる音がした。

伊太郎は慌てて踵を返す。まずい。自分がこの会話を聞いていたと知られるのは。きっと、まずい。

背中で小銭の音がした。

無神論者の伊太郎はこの時ばかりは神に感謝する。司はなにか飲み物を買ったつもりだ。時間が稼げる。

伊太郎は足音をできるだけ立てないように来た道を走った。振り返り向きもせずに。

二本目の缶コーヒーがガランと音を立てた時、伊太郎の影はその廊下からなくなっていた。

司はその缶コーヒーを緩慢な動きで取り出すと、小さくため息をついた。

さっきまで受話器を握っていた冷たい指先に、金属の温もりがじんじんとし、心地よいと言うより、表面だけを強引に熱にさらされる感覚がして眉を寄せる。

司はぼんやりとした自販機の光に照らされた缶を見つめ、その二

本目の缶コーヒーを贈る予定の相手が、まるでそこにいるように呟いた。

「廊下での立ち聞きは冷えたでしょう。コーヒーでも飲んで温まりませんか？」

と。

## 告白 19

伊太郎は部屋に急いで戻り、後ろ手に扉を慎重に閉めた。心臓が破れそうなほど音を立てている。

なんとか冷静を取り戻そうと視線を泳がせる。風香と重清はのんきにまだ夢の中だった。

元のように風香の体を起こして寝たふりをしようか。いや、そんな事すれば今度こそ風香を起こしかねない。じゃ、今、起きた所を装うのはどうだろう？その方がむしろ自然だし、どこに言っていたか直接問いただす事も出来るんじゃないだろうか。

伊太郎はそう決めると、窓際まで歩いた。ブラインドの隙間からは薄暗くもさつきより明るくなった空が覗いていた。

ブラインドを目の高さまで上げて外を見る。どうやらここは病院の端。タクシーがつけた道路から見ると裏手にあたる道に面しているようで、向かいには民家が並ぶ面白味のない風景が続いていた。

西向きなのか、太陽は見えないが、夜が白々と明けていく空はどこかぼんやりしていて、今の自分の頭の中のようなだった。

司は、誰と何を話していた？

耳に聞こえて来た単語を並べ、足りない部分を推測で細くしながら考える。

権利書。遺言状。急ぐ。

キーワードはどれも不穏なものばかりだ。

でも、昨日までの靄をまた一つ晴らすものでもあった。

そう、伊太郎がひっかかっていた事の一つが、司のボランテアへの協力。特にあの豚ババアの読書会だ。

あの時、司はいつも施設の間を全員一か所に集める。よほどの用事がない限り、あの笑顔でこり押しされ連れて行かれる。そして

司一人、事務所に残るのだ。

それは、つまり、他の部屋に誰もいない状態。司が全くのフリーって事になる。

その間に、奴は施設内を探して回っていたのかもしれない。

権利書はその時に見つけたと言ってもいいかもしれない。でも、遺言の方はどうだろう？普通、職場にそんなもの置くと思えない。と、すれば家って事になる。

で、ここで使えるのは。

伊太郎はそつとまだ眠っている二人を振り返った。  
彼らだ。

風香は司に従順だし、逐一報告していたらしい。  
さっきのやり取りだと重清も同じ。司のいう事はみな信じている  
といった感だった。

この二人に探らせていたのかもしれない。

なぜ？

それこそ乗っ取りか？

じゃ、一体誰と。

伊太郎は昨日の事を思い出し、顔を暗くした。もしかしたら、風香の懸念はそんなに的外れではなかったのかもしれない。

仮に、司がああ空知神父と晴美という女性と組んでいたとしたらどうだ？3人で施設の乗っ取りを計画。

司は風香の報告で宮治の健康状態も把握していたはずだ。薬の管理はどうしていたのだろう？

ものわすれを始めている宮治本人がしているとは考えにくい。か  
といって午後からしか来ない風香でもないだろう。と、したら重清  
だ。

もし、重清が司に言われるままに降圧剤の分量を減らす、もしくはあ  
の二人に薬の場所を示したいたりなんかしたら、この脳出血を人為的に起こす  
って事は考えられないだろうか？

やばい。ここは宮治の顔を見たらさつさと去る方がいい。そして、

風香に今の考えを……。

振り返り、その寝顔を見る。

安らかな風香の寝顔は幸せそうだった。何かの夢を見ているのだろう、頬も桜色に染まり、ぷっくりとした唇が微かに微笑んでいる。

伊太郎は思わずその頬かかる髪を、そっと人差指でさらってやった。

僅かに触れた指先に、その頬の柔らかさが伝わり、胃の辺りが重苦しくなる。

そしてふと、夜中に見た光景が脳裏によみがえった。

司にしがみつく風香。

そうだ。風香は司が好きなんだ。

そんなわかりきった事を、頭の中で言葉という形にはめる、それだけで逃げ出したくなる衝動にかられそうになる。

風香に、こんな事、話せるわけないか。

伊太郎がそう、溜息をついた時だった。

ドアノブが回される音がした。

## 告白 20

瞬時に体が冷え、伊太郎は凍りついたようにドアを凝視する。  
司が戻って来たのだ。

どうしよう。どんな顔をすればいい？どう、装えば……。

伊太郎の心が定まらないうちにドアはその隙間を広げていく。そしてあの、いつも通りの優しい声がこう言った。

「おはようございます。伊太郎君」

司は自分が起きているのを知っている。ってことは、気づいてたって事か！？

伊太郎の身がすくみ、体が凍りついた。

入って来た司は、缶コーヒーを手に部屋にその身を滑り込ませた。

「朝は冷えますよね。どうですか？コーヒーでも」

缶コーヒーを差し出すその様子は、自分の知っている司と微塵も変わりはない。

でも、伊太郎は、彼が普段と変わりがないほどに不気味さを感じ、差し出されたコーヒーを受け取る事も、声を出す事すらもできず、ただただ彼を見つめ立ち尽くした。

「どうしました？僕に何か？」

司が首を傾げる。白々しいまでの柔らかな笑みに、伊太郎が後ずさりしかけた時だった

「宮司さんのご家族の方！」

少々せわしない声が飛び込んできた。看護師だ。

二人は同時に振り返る。手術着だろうが、緑色の大きなかっぱを着てシャワーキャップをかぶったいで立ちの女性がそこには立っていた。

女性は二人を交互に見つめると、少し誇らしげにこう告げたのだった。

「手術、終わりましたよ。成功です」

すぐに風香と重清を起こし、4人は医師の説明を聞きに部屋を出た。宮治はICUで意識の回復を待ってから、しばらく様態を見て安定しているようなら一般病棟に移されるのだと、その看護師は道すがら教えてくれた。

まだ若い看護師だろうか、4人のうち、だれよりも司を意識しているのは視線でわかる。

罪というのはこう言う事もはいるのかな。

伊太郎は緊張から一時的にも解放されたからか、そんな事を考えた。

ムンテラ室という、簡単に言えば医師が患者や家族に病状や治療の状況、方針を説明する部屋に通された。

全員で入ろうとすると、看護師は少し困った顔で「ご家族の方意外はご遠慮いただきたいのですが」と制したが、ここで誤魔化されても気持ちが悪い。伊太郎は誰かが口を開く前に「僕たちはみんな親族の様なものです」と答えてしまった。

部屋の中には大きな机と6脚の椅子。レントゲンなどを見る為の光を放つ事の出来る真っ白なボードがあった。

中にいたのは中年の男性医師で、黒ぶち眼鏡と茄子の様な形の鼻が、パーティーズグズを連想させる顔だった。

医師はこの4人の顔触れに一瞬驚き、戸惑ったが、今度は司が事

情を説明するのに口を開いた。

「ご存知だと思いますが、宮治さんにはご家族がいらつしやいません。ここにいる松重清さんが同居人ですが、私達も家族の様なものでして……同席させてはもらえないでしょうか？」

医師は司とは20cm以上の身長差があると思われた。並んでいないのでわからないが、風香と同じかそれより小さく見える。まさに白衣に着られているといった感じで、まるで威厳はないがプライドだけは高そうだった。

「看護師が通したんですよね。どうせ、貴方が頼んだんでしょう。まあ、松さんが宮治さんの代理として、貴方方の同席を了承するのなら、私は構いませんが？」

棘と角のある口調に、司は眉を下げ、重清の方を見た。重清は黙って首を縦に振る。

「では、どうぞ。おかけ下さい」

医師はため息交じりに、疲労感たっぷり、厭味てんこ盛りに席を進めて来た。

さっきの看護師とはまるで正反対の視線を司に向けている。

この小柄な医師は美形を敵視する性格なのかもしれない。

これもまた、司の罪なのかな？

伊太郎は肩をすくめると、風香の隣の椅子を引いた。

医師の説明が終わり、伊太郎と風香は、司に「他の子どもたちが二人の外出に気がつく前に帰りなさい」と、タクシー代を握らされた。

もちろん。司の言い分は正しい。他の連中に自分達だけ夜間外出したと知れるとちょっとした騒ぎになるはずだ。まだ宮治の事も皆に知らせるかどうかが決めていない今は、この外出は伏せておく必要がある。

一目でも、と何度も風香は食い下がったが、今回ばかりは司は首を縦には振らなかった。

ICUには限られた人間が、限られた時間しか入れない。これ以上病院にいても会えないのは同じなのだ。

一般病棟に移れば連絡をすぐ入れるからと、司に説き伏せられ、風香はしぶしぶ伊太郎と再びタクシーに乗り、施設に戻った。

施設はまだ静まり返っていた。時間は6時45分。起床前に起きてくる奇特的な子どもはここにはいない。

朝の空気は肌に冷たく、伊太郎は首を亀のようにすくめた。

玄関の鍵は開けられており、中に入ると宿直のシスターがすぐに迎えてくれた。

伊太郎はそのシスターに目で風香を頼むと、シスターもその意図をくんで黙って頷き、風香の肩を抱くように「おかえりなさい」と手をまわした。

二三言シスターと交わす内容から、風香は自室に戻るつもりらしい。学校も今日は日曜で休みだ。ゆっくり体を休ませるの方がいいだろう。

伊太郎はシスターと自室に向かう風香の背中を見つめた。

小さな背中、小さな花がしおれたようにしょぼくれている。彼女といると、苦しいばかりだな。

伊太郎は舌打ちすると、その花に雨は降らせてやれないまでも、気休めに水をやるくらいはしたくて口を開いた。

「風香。心配するなよ。大丈夫だって」

しかし、風香は頂垂れたまま、何一つ言わない。足も止めない。聞こえなかったのかと思うくらい反応なく、伊太郎の方を気遣うように一瞥したシスターと廊下の向こうに消えて行ってしまった。

一人玄關に残される形になった伊太郎は、手の中にあるすっかり冷めた缶コーヒーに視線を落とした。

司はコーヒーを2本買って来ていた。1本でも4本でもなく2本。その意味するところは伊太郎の分と自分の分。

つまり、伊太郎が起きているのを知っていたのだ。あの自販機の前にいる時点で。

伊太郎は背中に一本、針金でも通ったような気分になった。

正直、巻き込まれたく何かなかった。が、今や抜けられないところにいる。なら、こっちから手を打ってやる。

伊太郎は腹をくくると、手の中の缶を握りしめた。

医師の話だと、宮治の出血は少なくな、広範囲の脳を圧迫していた。手術の結果、命には別状はないとまずは言える状態だが、後遺症の方は覚悟があるとの事だった。

年齢も年齢だ。意識がこのまま戻らないかもしれない。戻っても痴呆の進行や麻痺範囲の拡大は逃れられそうにないらしい。

つまり遺言状がすでに存在するとして、その書き直しを迫る事は出来なくなる。内容を彼らが把握しているか否かは不明だが、探している所を見ると、まずはその内容を確認するつもりか、その内容が彼らの意向に沿わないもので握り潰すつもりなのかかもしれない。

偽造も考えられない。

でも、遺言状の偽造は意外に困難だと聞く。もし握りつぶすに留まるとしたら宮治の死後、ここの権利は誰にわたる事になるのだ？

「ああ」

伊太郎は声を漏らす。

配偶者も子どももない。他の親族もしいないのなら、きっと生活を共にしていた重清のものになる。そしてその重清は司のいいなりの可能性が高い。こうなれば司の手に落ちたも同然だ。

ようやく、司の目的がはっきり見えてきた。

「遺言状を先に探し出す必要があるな」

内容は分からない。でも、少なくともそれが無い状態に持ち込むのは、司の思うつぼだ。

自分に話を聞かれても慌てず、いつもの表情を浮かべている司のあの顔を思い出した。

中学生に何にもできないと思っているのか。それとも自分の計画に自信でもあるのか。

ふざけるな。

施設は……。

伊太郎は周りを見回し、目を細める。

朝日がそこかしこに射し込んでくる、玄関やそこから伸びる廊下。嗅ぎ馴れた匂い、肌に馴染んだこの空気。

風香の影が遠くで消えたその先を想う。

ここは、皆の、風香の居場所なんだ。

そんなのを、こんな胡散臭い奴に任せられるか。

伊太郎はもう一度コーヒーを握りしめると、勢いよくプルトップを開け、一気に自分の喉に流し込んだ。

コーヒーのほろ苦い味が体に沁み渡たっていく。そして伊太郎はそれを全て飲み干すと、玄関の隅のゴミ箱にありったけの力で投げ捨てたのだった。

部屋に戻ってベッドに倒れ込んだ伊太郎は、どつとのしかかつて来た疲労に、今度は夢も見ないほどの眠りへと引きずり込まれた。

そんな伊太郎を起こしたのは誰でもなく、空腹だった。

ぼんやりとした頭を抱えて身を起こす。背中とお腹がくつつきそうだっていうか、離れることあるのか？なんてくだらない事を考えながら時計を見る。

空腹にもなるはずだ。もう昼の1時を回っていた。

伊太郎は気だるい体を引きずり、食堂に向かった。いつものように食べ遅れの人間の食事は、トレイにラップが掛けられ棚に置かれている。今はその棚には伊太郎の分の食事しか置かれていなかった。これを自分でレンジで温め直し食べる。それがここでのルールだ。

今日の昼食は豚汁にご飯。煮物に柿二切れ。いつも通りの栄養満点、ポリウム控え目のメニューだ。

風香のトレイがなかったって事は食事はしたという事だ。

すこし胸を撫で下ろしながら伊太郎は、温めるのが面倒で「そのまま席につき、箸を持ち上げる。

食堂には他に誰もいない。日曜にもなると出かける奴もいるから施設は結構寂しい状態だ。

とにかく飯を詰め込んで作戦を練ろう。

そう勢いよくご飯を口にかきこんだ時だった。

「やあ、君は昨日の」

「!」

食堂の入口から声がして伊太郎は驚き立ち上がる。

そしてそこにいる二人に目を見開いた。

二人は何食わぬ顔でそこにいる。二人……そう、彼らは昨日宮治の家で会った、神父と女性、その人だった。

司は一度家に戻ってから、入院に必要なものを揃え病院に戻り、重清と交代する形で宮治に付き添っていた。

宮治の術後の経過は特に大きな問題はなく、意識も一時的に回復したとことで午後になってすぐに一般病棟に移されていた。

ま、それは大方建前も含まれていて、本当は交通事故の救急搬送が数件あり、ICUのベッドを空けないといけないという事情があるらしい。

お喋りな看護師が話しているのを耳にして司は昔を思い出し、複雑な思いでそれを胸の内に収めた。仕方のない事なのだ。

そう、実際、世の中にはどうしようもない事ばかりだ。

白と黒、正義と悪そんな風に割り切れないものがごまんとある。

自分の、宮治や施設への気持ちだって……。

意識が戻っても彼の視界に入らない場所を考慮して、司はベッドサイドに腰かけていた。まだ容態はいいとはいえない。

ナースステーションすぐ傍の個室で、宮治はモニターと呼吸器をつけている。他にも腕と尿道には管が通されていて、その様は決して人間の体温を感じさせるものではなかった。

貴方はこんな最期で、どうですか？

心の中で静かに語りかける。

すると、宮治の頬が僅かに痙攣し、唇が微かに動いた。

「！」

司は身を強張らせ立ち上がる。宮治に顔を合わせるわけにはいかない。彼が目を開けるのなら、すぐにここから立ち去らねばいけない。

しかし、宮治の目は開かなかった。その一方、唇からかすれた声の様な物が漏れる。

司は耳をすませた。

もしかしたら遺言状のありかに関する事を言うかもしれない。そんな不確かな期待を持って。

じつと忍耐強くその声が形になるのを待つ。

どんな小さな手がかりでもいい。どうしても自分には遺言状が必要なのだ。

その時、ふいに宮治の指が動いた。

それは宙をさまよいながら、何かを掴もうともがいている。

そして、こう呟いた。

「神よ……ゆるし……」

司は老人のその言葉に絶句した。

今更、懺悔か？

今更、何の告白をするつもりだ？

今更、自分だけ助かるつもりか！？

司は硬く目を閉じると、拳を握りしめた。

自分の中に渦巻く感情が狂気に変わり、目の前の老人を手にかけて、これまでの日々を無駄にしないようにする、そのために。司は前髪をかきあげると、自身を落着かせるために深呼吸を一つした。

チラリと指の隙間から老人の方を見ると、意識は再び深淵に落ちたようで力なく手をたらし、声をもう発してはいない。

モニターの音は一定のリズムを刻んでいるから、容態に変化があったわけではなさそうだ。

司は今度は安堵の溜息をつくと、椅子に座り直した。

ふと、さつき連絡を入れた風香の事を思い出す。

電話の向こうの彼女は、純粹に一般病棟へ移った事を喜んでいるようだった。

彼女はいつだって素直で、屈託がない。

でも、本当にそれだけなのか？

と、司は疑っている。

密かに、彼女が遺言状を保管しているのではないかと踏んでいるのだ。宮治にはそれを預けられる様な人物は二人しかいない。

重清と風香だ。

前者には心当たりが全くないというから、自然、彼女しか残らない。

施設の方は望みは薄いと思いつつも、一応一通りは調べた。権利書は書類棚の引出しに細工されていた二重底に隠されていた。

こういった事に頭が回るのなら、遺言状ぐらい作成されていてもおかしくはないし、あるとして、誰かに託していると考えるのが妥当だ。

施設の顧問弁護士にもそれとなく当たったが、弁護士でもなかった。

ないならないで構わない。一番厄介なのは、この老人の死後にひよっこり出てくる事だ。

「さて、風香ちゃんは来てくれるでしょうかね」

司は窓の外を見た。

紅葉も終わり、赤茶けた色に変容した水気のない葉が北風に吹かれ、枝先で揺れていた。

寒空はどこまでも青く澄んでいたが、その散り際を見極められずに枝にしがみつく枯葉をみる男の目は、それを屠ろうとする無情な風より冷たく、悲しみの色に染まっていた。

ドアが音を立てる。

何者かの来訪に、司は腰をあげて扉を開けた。

「容態は？」

目を合わせたとたんに挨拶もなく放たれた問いに、質問者が宮治の事を心配しているのだと感じ、ようやく司はいつもの自分を取り戻し微笑みながら答えた。

「小康状態です」

「じゃ、ここは私が。司さんは」

司は頷く。そして再び窓に目を移した。

年老いた枯葉の姿は、もう、そこにはなかった。

## 告白 23

「あ、あんた達……」

伊太郎は思わず立ち上がると二人を見つめた。

「こんにちは」

晴美が微笑みを浮かべ伊太郎のすぐ傍まで来た。

伊太郎は警戒しながらも、寝起きの頭をフル回転させる。

なぜ彼らがここににいる？ 遺言状はもう手に入れたのか？ それとも権利書の方を取りに来た？

否、どちらの場合も二人揃って来る必要はない。

今朝の司の電話の相手が彼らだとして、ここにいる理由は……。

「こんにちは。日曜ですが、ここに何か用ですか？ 職員の人に用事なら、平日の方がいいですよ」

「違うのよ。今日は司遼太さんという方に用事があつて」

「やっぱり、知り合いか？」

「司さんから、なにか連絡があつたんですか？」

「いえ？」

しかし、晴美は意外にも首を横に振った。いや、演技なのかもしれない。伊太郎は観察を止めずに言葉を続ける。

「でも、今日、ここに司さんがいるとは限らないじゃないですか。日曜ですよ？休みの可能性だってあるのに」

「それは大丈夫。重清さんに、昨日、聞きましたから」

「は？」

「昨日、帰ってからすぐに電話をしたんですよ。こちらも用事があって、宮治さんをお一人にしたまま帰ってしまったものですから、気になります」

空知神父が静かに話す。微塵も戸惑いや誤魔化しのない声だ。

「そしたら重清さんが出られましてね。宮治さんは心配ないと。で、事のついでと申しましたら失礼ですが、出来るだけ早くに司さんにお会いしたいとお話ししましたら、シフトの方を教えてくださいいただきまして」

「重清さんが……ですか？」

おかしい。どうして重清は嘘をついた？

彼が帰った時、すでに宮治は倒れて意識不明だったんじゃないのか？それに、なぜ、この電話の事を黙っていた？ つじつまが合わないじゃないか？

嘘って言うのは、何かを隠したい時につくものだ。

重清は何を隠そうとした？

伊太郎は目を伏せた。

自分に注がれる二人の視線が気にならないわけではないが、不思議と彼らは司の居場所を聞くでもなく、自分の言葉を待っているように思えた。

この嘘で隠される事実は、重清が帰って来た時、まだ宮治に意識はあったという事だ。

なぜそれを隠さないといけない？

別に帰って来てから倒れたというシナリオでも問題ないはずだ。

重清が困ると思ったのは、きっと……。

伊太郎は自分の乱暴な推理が事実の一端を掠めていたのを確信し、溜息をついた。

重清が宮治が倒れる原因を作ったからだ。それが司の指示かどうかまでは残念ながら分からないが、少なくとも、施設の職員でない重清が『何故か』司のシフトを知っていた事は明確になる。

やはり、司と重清は繋がっている。そして、宮治の容態悪化も人為的なものである可能性が高い。

「賢い子ね」

「え？」

伊太郎は晴美の声に顔を上げた。今の、口に出して話していたつもりはないんだけど？

「聞こえてたわよ。よく、頭の回る子ね」

晴美は目を細めると、伊太郎の頭を撫でた。

次いで、言葉を添える。

「でも、私達は司さんにあつた事はないの」

全てを見透かされているようで、伊太郎はゾクリとすると晴美の手を振り払うように後ずさりした。

晴美は放り出された手を自分の胸の前で結ぶように腕組みし、小

首を傾げる。

結びあげられた髪が一束首筋に落ちて、何とも色っぽい。

「最後に司さんに会ったのは？」

どうやら嘘はつけなさそうだ。伊太郎は混乱したまま晴美と空知神父を交互に見ながら答えた。

「病院で」

「病院！？」

空知神父が意外そうな声を上げた。晴美の方はじっと黙って、少し残念そうに視線を落とす。

「昨日、宮治さんが倒れたんです。脳出血です。緊急手術になって、僕と風香と司さんと重清さんが、今朝まで病院に詰めていました」

「で、手術は」

「成功です。でも、意識回復が見込めるかどうかは厳しいそうです」

二人が視線を交わした。それだけで何かの話がまとまったようだ。二人はこれまで見せていた柔和な仮面を脱いだような、厳しい顔つきになると伊太郎の方を同時に振り返った。

「で、今は」

「わかりません。司さんと重清さんが残りましたから、どちらかが付き添っているとは思いますが」

「風香さんは？」

「それもわからないんです。でも、確かなのは起きて昼飯を食べた事くらいで……」

その時だった。食堂の入口の方から声がした。それは小さな声だったが知っている声で、伊太郎は半身横に体をそらせてその方を見る。

「君は……」

昨日の三輪車の女の子だ。女の子は三人を見上げながら

「お姉ちゃんなら自転車に乗って出かけたよ。かくれんぼしてたら出ていくの見たの」

と答えた。風香が一人で出かけた！？

別れた時のしおれた背中を思い出す。とうてい気分転換にどこかふらりと出かけたとは思えない。彼女なら司の連絡を待ってもおかしくないはずなのに……。

あ、ということは司から電話があつたのか！

「きつとそうよ」

また晴美が自分の考えに相槌を打った。妙だ。そんなに自分はその考えを逐一口にしているのか？

「今は、それはいいでしょう。でも、そのまま病院に向かったのかしら」

晴美がぴしゃりと伊太郎の疑問を封鎖すると、今度は独り言のよ  
うに呟いた。

少女は首を横に振る。

「ううん。私、聞いたもん。どこにいくの？って」

「どこだって？」

「みやじいのおうちに、大切なものを取りに行くって言ってた」

「！！！！」

宮治の家にある、大切なもの。

遺言状か！

風香はまだ司を微塵も疑っていない。こんな時だ、もしかしたら  
司に誘導されて風香は……。

「止めなきゃ！」

伊太郎は誰に言うでもなくそう言葉を零すと、椅子を蹴って走り  
だした。

「伊太郎君！」

背中では神父の声がした。

まだ、彼らへの疑惑を捨て切れなかったわけじゃない。行動を一緒にす  
る事は出来ない。

風香、早まるなよ！

伊太郎は祈るような気持ちで施設を飛び出した。

## 告白 24

自分がまだ金のない子どもで、最も早い移動手段が自転車なのを伊太郎は今ほど恨んだ事はなかった。

一応、何度かかけた風香の携帯は電源が切られていた。

国道を、伊太郎は破けそうな心臓と、喉をすり切らしそうな乱れた呼吸に顔をゆがめながらペダルを漕いだ。

昨日、風香とここを走った時は、こんな事になるなんて思いもしなかった。

風香は、もし、司の本当の顔を知ったら、どんな顔をするのだろう。

そうだ、宮治の生死や施設の行方より、自分は……。

伊太郎は昨日の風香の涙を思い出す。

ごめんなんだ。アイツの泣き顔を見るの何か。

「風香っ」

伊太郎はハンドルを切り、勢いよく道を曲った。国道から側道に入れば宮治の家はすぐだ。

伊太郎は自転車を投げ捨てるように降りると、走って玄関に走り込んだ。

「風香あー!!」

叫ぶ。しかし返事がない。

見ると、玄関には風香の靴と、男ものの靴が一足。

「風香!」

もう一度呼びながら廊下を上がる。

その時、空気が動いた。宮治の部屋から顔が覗く。それは

「司さん」

「伊太郎くん」

司は青い顔をして明らかに動揺していた。

伊太郎は足早に歩み寄ると司に掴みかかる。

「風香は、どこにやっただんですか！ 風香は……」

その時、司の向こうに見えたその景色に伊太郎は絶句した。

そこには、真っ白な顔で横たわる風香の姿があった。

全身の血がざっと音を立てて引いて行く。指先にしびれるような感覚が走りぬけ、伊太郎は司を掴んだ手にさらに力を込めた。

「お前！風香に何をした！」

「違う！僕じゃない。僕も今来たばかりで……」

司は必死に言い逃れをしようと首を横に振る。昨日は宮治で、今日は風香か？ いい加減にしろ！ こいつはどこまで……。

「ふざけんな！」

伊太郎は思いっきり司の横面を殴る。司の体は軽く後ろにふっ飛び壁に当たって崩れ落ちた。

「風香！」

伊太郎が駆け寄る。そして彼女を抱きあげた。

嘘だろ？　嘘だろ？　嘘だろ？　嘘だろ？

伊太郎は何度もその言葉を頭の中で繰り返し、こみ上げそうな嗚咽を唇を噛んで飲みこんだ。

風香の頬にこわごわ触れてみる。

冷たい。瞼もの中の眼球の動きも見とれない。そして昨日までよく動いていたそのふつくらとした唇は、今や青黒くて……。

「風香！　嘘だつて言えよ！！」

伊太郎は思いっきり彼女の体を抱きしめると叫んだ。

しかし、風香のその手はだらりと垂れ、もう命は輝きを失ったかのようなのだ。

伊太郎はそのまま司を睨みつけると、今までに出したことのないような声でどなった。

母親に捨てられた時も、どんな人間に同情された時も、孤独を感じていた時にも声一つ上げなかった自分の心が、今は割れて砕けてしまいそうだ。

「司！　どうして風香にまでこんな事したんだよ！　そんなにあの施設が、遺言状が欲しいのかよ！」

司の顔が跳ねあられ目が見開かれる。

「風香ちゃんは僕じゃない。確かに、遺言状は探していた。君や風香ちゃんを使って探りを入れさせようと思っていた。でも、僕は……」

「うるさい！」

伊太郎は風香をぎゅっと抱きしめると目をギュツと瞑った。

怒りより悔しさが、砕け散りそうな心を僅かに奮い立たせていた。

わかっていた。気がついていたのに、自分は何にもできなかった。

のんきに眠って、風香が一人ここに向かったのにも気付かなかった。

あの、背中に何にも、何にも……。

「風香は、アンタのことが好きだったんだ」

ポツリと、雨雲から初めに落ちる涙のように、伊太郎の声が零れ落ちた。

告白 25

「え？」

「だから、僕は何にも言えなかった。風香に知られる前に、アンタより先に遺言状を探し出して何とかしようと思ってた。でも、甘かったんだ。今朝、僕はアンタの電話を聞いていた。アンタがそれに気が付いているのなら、僕が動くより先に行動してもおかしくないんだ。僕は、それに気がつけなかった。僕が……」

ごめん。風香。

僕が話していれば。

僕が動いていれば。

僕にもっと行動力があれば。

伊太郎は齒を食いしばり風香を抱きしめた。

もう、あの笑顔が見られない、そう思うと深みのしれない沼に突き落とされたような気になる。

これが絶望か……。

その声が聞えた時は、伊太郎の瞑られた目から涙がこぼれ落ちかけた、その時だった。

「い……たろ」

「……」

伊太郎は耳を疑い、そつと目を開けた。  
そして目に映ったのは……。

「風香」

風香が薄らと目を開けて微かにその口の端を上げていた。  
信じられない。

本当に!?

伊太郎は息を飲みながら風香を見守る。

「風香ちゃん!？」

司も驚き、身を起して二人の方を凝視した。

風香は二人に見つめられる中、顔をしかめながら上半身を起こすと、不思議そうに周囲を見回した。

伊太郎はその、白い肌に徐々に生気が戻っていくのを奇跡でも見るような気持ちで見守る。いや、実際奇跡なのかもしれない。風香が死んだのを確認したわけじゃないが、でも、これは。

「風香ちゃん？」

司が声をかけた。風香はその声到我に返る。

奴に襲われたせいで意識を失っていたのだ。当然、拒否の態度をとると伊太郎は思っていた。が、

「きゃっ!やだ!」

風香が拒否したのは伊太郎の方だった。

風香はすぐ傍にいた伊太郎の胸を思い切り突き飛ばすと、倒れた伊太郎に一瞥もせずいつものように、恥じらいの表情で司を見つめた。

「いやだ。勘違いしないでくださいね。私、気を失ってたんですか

？ でも、伊太郎君と私はそんな中じゃ。ね！？ 伊太郎君」

こんな時も伊太郎『君』かよ。ってか、自転車すっ飛ばして助けに来た自分にこの仕打ちはねえんじゃねえの？

伊太郎は顔をしかめながら体を起こすと、さっき流した涙を返せ、と心の中で愚痴りながら風香の方を見つめた。

それにしても、何だ？ 風香のこの態度は。本当に司じゃないのか？

「風香。それより」

「それよりとは何よ！ ハッキリ否定してよ。ここは」

「それより、ですよ」

口を挟んだのは司だった。

司は風香の傍まで来ると、その手を取り、間近で風香の顔を見つめる。風香の顔はさっきの白から今度はゆでダコのような真っ赤に変色していく。

お前はマンガか。伊太郎は呆れながら彼女をねめつけた。

「風香ちゃん。ここで何があっただんです？」

「え？ あ、そうだ！」

風香は一瞬目を瞬かせてから、急に大きな声を上げた。そして立ち上がると、今度は怒りの形相に変わり周囲をぐるりと見回す。

「もう、ビックリしたんだから！ ねえ、どこに行ったの！？ アイツ。それに……あ！」

風香は自分の手の中に何もない事に気が付いたのか、手を見つめると、今度は大股で持ち運べるような大きさのCDコンポに近づき、声を上げた。

「酷い！ やっぱり持ってたか！」

「なんだ。強盗にでもはち合わせたのか？」

伊太郎が訊いた。しかし、風香は唇を尖らせ首を横に振る。

「違うよ」

風香はまだその失った何かを諦めきれないらしく、キョロキョロと周りを見回しながら答えた。

「重清だよ」

## 告白 26

「え？」

重清！？

伊太郎は思わず司と顔を見合わせた。司も意外だったらしく驚いた顔をしている。

風香は「もう」とこんな状況にのんきな声を漏らし

「ほら、司さんの二回目の電話で私、宮じいの大切なものを持ってきてって言われたでしょ？だから、ここに取りに来たの」

「私は、一度しか電話してませんよ」

「え？嘘！？」

風香は目を丸めると、携帯を取り出した。携帯はやはり電源が切られていた。

すぐに起動する音が聞こえ、風香は着歴を確認する。

「あ、だって。ほら、朝に公衆電話から二回。一度目は一般病棟に移されたって。で、その後すぐに二回目があって……」

おかしい。伊太郎は顔をしかめると風香の手元の携帯を見た。

「な、二回目って本当に司さんだったのか？重清さんってことは」

「ないよ。だって、うん、ちょっと聞こえにくかったけど、どもってなかったもん」

宮治の容態を知る男でもりのないのは伊太郎を覗いて、確かに司だけだ。伊太郎はもう一度司の方を見た。しかし、司は知らないと言を振る。

「でもさ、重清、変なのよ。私がこの部屋で『見つけたあ』て言った途端、すっごく怖い顔してさ『よこせ』なんて言つて。で、気がついたら伊太郎の顔があつたわけ。でも、なんであんなもの欲しがつたんだろ」

風香はどうやら意識を失つた原因となる襲撃はよく覚えていないらしい。首をひねり天井を見上げている。

「あんなもの？遺言状の事かい？」

司の声。

そう、それだ。伊太郎は緊張の面持ちで風香を見つめた。

やはり、風香は遺言状のありかを知っていて、それを取りに来たのを重清に持ち逃げられたのか。

しかし、風香は「ゆいごんじょう？」とまるで初めて聞いた言葉であるかのようにそれを反復し首を傾げた。

そして、一度開けたCDプレーヤーの蓋を閉めながら

「違いますよ。ディスク。昨日、宮じいに持ってきた、CDですよ」

と答えたのだった。

どういう事だ？

再び混乱し始める状況を整理するように、伊太郎は思考を巡らせる。

状況の構成因子を集め、分析、全体像の再構成。再びその構造が

崩れ始めたら新しい要素を付け足し再び分析、再構成。

その繰り返しを続ければ、必ず見えてくるはずなんだ。

靄の向こうが。

ここで新たに加わった因子は、重清が、風香を襲ってCDを奪って逃げたという事だ。

何のために？

まだ司が演技して無いとは言い切れないが、どちらかというとこの状況は……。

「あ」

伊太郎は声を思わずあげた。

そうだ、初めから何かおかしかったんだ。

掴めそうで掴めなかった事実。

でも、やっと、やっと見えた。

伊太郎は顔を上げると、司を正面から見据えた。誤魔化されないように、逃げられないように。

この答えで自分の推測はほぼ確信に近くなる。

まだ動機だけは見えないが、全体像の構築に置いて、最後のピースが埋められる。

ボランティアへの協力

宮治の容態悪化

重清の嘘

2回目の電話

風香を襲った犯人

持ち去られたCD

すべてが繋がっていく事になるのだ。そしてその先にいるのは、この計画を練り、彼らを検査した首謀者。

伊太郎は興奮を抑えると、ゆっくりとその口を開いた。

「司さん。司さんはここに、何しに来たんですか？」

伊太郎は最後になるだろう彼への質問を口にした。

司は一度口を開け、すぐに閉じる。そして伊太郎から視線を反らすと眉を寄せた。

「それは……」

司は言葉を濁す。なぜ、庇う？ 何故、司は。

「このままだと、全部、司さんのせいにされますよ！」

「……」

「なに？ どういう事？」

風香が声を上げる。伊太郎は司ににじり寄るとさらに言葉を繋いだ。

「司さん。利用されたのはアナタの方です。アナタは嵌められたんですよ！」

力なく司の首がもたげられた。しかし、その瞳には驚きも憎しみもなく、ただただ悲哀が揺れているだけだ。

「わかって、ましたよ」

「え？」

伊太郎は司の目に嘘がないのに戸惑った。靄の向こうがまた、遠のいて行こうとする。

司は、重清は、一体……。

「伊太郎君！ いる?!」

玄関が乱暴に開け放たれる音がした。三人とも身を強張らせ、玄関の方を振り返る。

廊下を慌ただしく駆け抜ける足音がし、晴美が飛び込んできた。

「あ、あの?」

晴美は三人がそこにいるのをすぐに確認すると「ちょうど良かったわ」と呟き、一呼吸置いて、それを告げた。

「宮治さん、今、危篤状態に……急いで病院に行きましょう!」

三人の息が飲まれる音だけが、室内に響いた。

病室に駆け込むと、看護師が宮治のベッドの傍で処置を終えた所なのか顔を上げた。

少々吊り目の看護師は、その目をすつと細め同情を寄こすような視線を投げた。

「宮じいは！」

「心拍が……落ちてきています。延命措置はされないと伺ってますので、このままモニターで……」

見ると確かにモニターの心拍を示すグラフの山と山の間隔が伸びている。電子音の間延びした音が、宮治の命が途切れ行くのを教えていた。

風香は飛び込むように宮治にの傍まで身を躍らせると、その細くしなびた手を握り、その額をすりつけた。

「やだ。やだ。嘘でしょ。宮じい。まだ逝かないでよ。やだよ」

風香の声が病室に痛々しく響く。

伊太郎は身じろぎ一つ出来ないでその光景を見つめた。

自分にはどうしようもできない。宮治を助ける術何か一つもわからない。でも、でも、宮治はまだ生きている。

モニター音が早くしると急かしていた。

「司さん！ いいんですか！ こんな。こんなの」

「伊太郎君は……本当に、頭がいいんですね」

司は血の気のない顔にあやふやな笑みを浮かべた。幽幻ともいえるうすら寒いほどの美しさに、伊太郎は言葉を嚥んだ。

司はそつと風香の隣に立つと、宮治を見下ろす。

「伊太郎君は、どこまでわかったんですか？ 宮治さんが倒れた原因を作った人間ですか？ それとも、僕が宮治さんを風香ちゃんを利用して、ずつと監視してた理由ですか？」

「え？ り、よう？ ？」

風香の顔が挙げられる。伊太郎にはその言葉を彼が敢えて選んだのがわかった。

司は、どこまでも悪人を最後まで演じるつもりだ。

それほどまでに首謀者を庇って……。

「ええ、そうだよ。風香ちゃん。僕はね、この爺さんの所有する施設の権利権を奪うつもりだったんだ」

口調はあくまでも柔らかく、そして冷たい。でも、伊太郎にはそれが痛々しく見えた。

「それには協力が必要だった。その協力者が君と、重清だ。宮治は天涯孤独の身だ。このままなら重清に遺産は相続されることになる。でもね、一番怖いものがあつた」

「怖いもの？」

「遺言状さ」

司はそついうと宮治の顔を覗きこんだ。顔を覆う神の髪の合間から覗くのは、感情を消し去った顔。

伊太郎はそれが見覚えのあるものに様な気がした。  
どこで？

ふと窓の方を見る。窓ガラスに映る自分の姿。

「あ」

そうだ。迎えを待つ、自分の顔のそれと似ている。  
もしかして、司が彼らを庇う理由は……。

「司さん！ そんな考え間違っている！」

「伊太郎君？」

司が振り返った。

司は、きつと自分と同じ孤独を知っている人間なんだ。だから、利用された。司は始めから自分の為じゃない、利用され、その罪を全て引つ被るつもりで、黙ってたんだ。

「どうして、もっと直接宮治さんと話さなかったの？ 話せば違ってたかも知れないのに」

「なにも、違いますよ」

司は頑なな態度を崩そうとせず、顔を上げると、ふとその動きを止めた。

「あゝ！」

風香も声を上げ、眉を吊り上げる。

伊太郎は二人の視線の射す方に振り返った。そこに誰がいるのかは見当がついていた。

伊太郎は腕を組むと、精一杯、怒りを込めてその二人を振り返った。

「遅い、到着ですね。重清さん。そして……」

この計画の首謀者。

「柳さん」

可哀想がりの豚ババアだ。

「な、どうして」

重清が動揺して一步後ずさる。豚ババアこと柳は顔をしかめ、重清を一睨みする。

「どうして。風香と司さんがここにいるか、って言うのを言ってるんですよね」

伊太郎は風香を庇うように立ち、二人を睨みあげた。部屋にも入ってこれずおろおろと言葉を無くす重清とは逆に、柳は堂々としたものだ。

伊太郎に対峙すると、ナメクジの様な分厚い唇をくねらせた。

「こんにちは。伊太郎君。どうしたの？ 私がここにいるのに驚いているのかしら？」

「いいえ」

伊太郎は首を横に振った。

「ここに必ず、現れると思ってましたよ」

「どういうことかしら？」

柳は丸太の様な腕を組むと、伊太郎の後ろの司を一瞥し、すぐに伊太郎に視線を戻した。

心拍数が、徐々にその感覚を開けているのが背中で聞けてとれた。

伊太郎は一呼吸置くと話し始めた。

「今日、一つおかしい事実が浮かんだんです。昨日、帰って来てすぐに宮治さんが倒れているのを見つけて通報したはずの重清さんが、帰宅後の空知神父からの電話を取って『宮治さんは大丈夫』って答えたって事実が」

重清は目を伏せる。

「そうですよね？ 重清さん」

「そうなの！？」

ややヒステリックな声が飛ぶ。もちろん柳の、だ。重清は頷く。そして、伊太郎が予想した通りの事を口にした。

「司からの連絡だと思ったんだ。あの家は、滅多に電話は来ないし。急な訪問で計画が狂ったから……」

「計画とは、宮治さんの降圧剤に細工する事ですか？」

重清は頷いた。

「う、そ」

風香の声がする。司は否定しない。重清は唇を一度強く噛むと、顔を勢いよく上げ、何かにすがりつくように声を上げた。

「でも、違った。客が来た。だから、とっさに嘘をついてしまった

んです。本当です！ 俺は司のいいなりで……本当は怖かったんだ。施設の権利なんて、俺は」

って、言うと思ったよ。伊太郎は冷めた思いで、見ようによっては気の毒なほど顔を崩す重清を見つめた。

柳の傍を通り過ぎ、重清の目の前に立つ。

そして、口の端を上げて突きつけた。嘘をたった今、自分で証明した事を。

「重清さん」

伊太郎は声を落とす。そしてその肩に手を置いた。

「流暢な説明、どうも」

「！……！」

その場に一本の矢が走り抜けたような緊張が走った。みな視線が、重清の口、その一点に集まる。

「吃音は、演技だったんですね？」

沈黙が重く重清にのしかかる。伊太郎はそれらの反応の効果をゆっくりとみてとってから、さらに話を続けた。

「僕が初めに違和感を感じたのは、救急車への通報です」

「通報？」

風香の声に頷く。

「おかしいと思ったんだ。重清さんは重度の吃音の筈だ。緊張や話し始めは必ずと言っていいほど、僕だって聞き取れないくらいに吃音だったんだ。それが、家に帰って意識不明の宮治さんを見て、冷静に救急車を呼べると思う？」

「あら、それは偏見じゃない？ その時はうまく話せたのかもしれないでしょ」

柳が肉に埋もれた目をさらに細めた。しかし伊太郎は怯まない。

「それだけじゃない。時間的にもおかしいんだ。司さんが仕事が終わるのが5時とする。珍しく残業も何もないとしてね。僕たちが行った3時頃にはもう重清さんはいなかった。司さんがどれだけ早く着いても5時すぎ。証言のままだと、重清さんは早くて5時に帰って来た事になる。たかだか福々堂の羊羹を買いに？ 時間かかりすぎじゃないか。客用のお茶受けを買いに行ってるんだ、寄り道は普通、考えられない」

伊太郎は一息ついて、重清を見る。重清は顔を青くし、もはや反論の気力はないようだ。嘘をつくその口を抑え、壁に寄り掛かった。伊太郎は再び病室内に振り返る。

「つまり、初めの重清さんが帰宅して宮治さんを発見、通報して救急車が駆けつけたところに、シスターと訪ねて来た司さんが居合わせた。この部分から嘘だったんです。じゃあ、何故嘘をついたのか……。それは空知神父の電話です」

そういうとチラリ、晴美の方を伺った。やはり何もかもを見透かすような目で、彼女はこちらを見ている。伊太郎は肩をすくめ、続

きを話すことにした。

「重清さんにとって、来客は全くのアクシデントだった」

伊太郎はこう想像していた。

重清の当初のシナリオはこうだ。

風香がやってくる時間に合わせ、宮治の血圧を上げる。昏倒とする所を二人で目撃し、風香に救急車を呼ばせた後に、遺言状を出させ、それを奪うのだ。

もしかしたら、その先に風香を始末し、司に風香殺しを押しつける算段もあったのかもしれないが、そこまではわからない。

とにかく、来客の存在で重清は動揺した。

帰ってきたら幸い宮治は一人で客は帰っていたが、肝心の風香も帰った後だ。

これでは計画は実行されない。重清は焦り、鳴った電話が、首謀者からの首尾確認の電話だと勘違いして、思わず取ってしまったのだ。

「電話の内容は『宮治さんは大丈夫』というのと『司さんのシフトについてでしたよね。重清が誰かさんからの電話と間違って電話を取ってしまったのは本当でしょう。でも、重清はどこかで気が付いたんです。風香の件は今すぐにでなくてもいい事に。それでとっさに考えたんです。これを利用し、計画通りに宮治を殺し、遺言状を手に入れ、全てを司の指示の元にやっているように見せかける事を」

伊太郎は「そうですね？」と重清に声をかけてから続けた。

重清の方は、もはや廊下に崩れ落ち、項垂れ、声も上げない。

「明らかに嘘とわかるそれをつき、きな臭さを残し、さらに自分と司の繋がりをちらつかせたんです。この嘘が有効になるかどうかは

分からない。神父が誰かに証言しない限りは無効だ。でも、この場合、電話を取ってしまった、そのミスさえカバーできればまずは十分だったんです。つつこまれたら、つつこまれたんで問題はない。今のように『すべて司の指示だった』という台詞を用意さえすれば」

で、偶然にも司は重清が連絡する前、救急搬送する時に現れた。難なく司から風香に遺言状の件を持ちかけるきっかけを作れたのだ。

## 告白 29

「そして、宮治さんは倒れた。計算通り、宮治は手術になり、その間に司さんは風香を連れて病院に来了。これで風香も宮治の命が危ない事を知る事になる。あとは、司の指示で風香が遺言状を差し出し、宮治が死に、司と風香を消すことができればいい。そして、二人を消す方法も重清にはあった」

伊太郎はそういうと、重清に背を向けたまま手を差し出した。声のトーンを僅かに変え、まるで誤字を指摘するような軽さで言葉を放り投げる。

「重清さん。あなたが風香から奪ったディスク。それは遺言状じゃないですよ」

「え？」

重清はむくり、顔を上げた。

「昨日、あの場にいなかったから知らないでしょうが、それは風香が宮治さんにプレゼントした、司さんのバイオリン演奏を録音したCDです」

「え？ええ！？」

重清は慌ててそのジャンパーのポケットからそれを取り出して見つけた。

やっぱり、重清はこのディスクを遺言状と間違え、風香を襲ったのだ。

伊太郎は自分の推理が合っていた事を確信し、今度はちゃんと向き直ると重清の手からそれを奪い取る。

「風香に二回目の電話をしたのも、重清さんですよ」

「あ」

「おそらく、重清さんは、司さんが風香に電話をかけるのを待ってたんだ。司さんには帰ったと言ったのか、一緒にいたのかはわからない。けど、風香への電話を確認できるようにこの病院にいた。ここで、長年の吃音の演技も生きてくる。電話だけじゃ、簡単には誰かは分らない。肝心なのは、相手に電話主が誰かを信じさせること。重清は司さんが電話した直後に電話し、風香にこう言ったんだ『宮治さんの病状はおもしろくないから、彼の大切なものを持ってきてくれ』と。それから重清さんは宮治さんに家に行って、風香がこのCDを探し出すのを見た。だからそれがつきり遺言だと思い、襲った」

「待つて！じゃ。重清は、CDを遺言と間違えたわけ？」

風香が声を上げる。伊太郎は頷いた。

「これまで探しても見つからなかった。それに宮治さんは半身麻痺で痴呆も進み始めている。文字を書くのは無理なのではないか。なら、紙じゃなく別の形で残しているのかもしれないとも思ったんだろう。重清さんは知らなかったんだな。遺言はパソコンや音声で残したものは無効なんだって事」

「そつなのか？」

「この馬鹿」

柳が小さな声で舌打ちする。

「とにもかくにも、重清さんは、遺言状を手に入れたと思った。最後の仕上げは、司に全ての罪を被せる事。そして相続人の可能性が考えられる風香の始末だ」

テレビで聴くような物々しい単語は、意外に口にするのは気恥ずかしかったが、伊太郎は揺さぶりの効果を狙い、続けた。

「秘密を知る司は邪魔だった。普段から宮治に親しく、宮治が『娘』といっってはばからなかった風香の存在も、同じくね。だから、一石二鳥を狙った。風香を殺し、司を宮治の家に寄こして風香殺しの犯人に仕立てるつもりだったんだ。図らずも僕が目撃者になってしまったんだけど、司さんがつく頃を見計らって通報でもしたのかもね？今頃、警察が空っぽになった宮治さんの家にいるかもしれない。警察に通話記録があるはずだから、調べればすぐわかるよ」

伊太郎はそういうと、風香にCDを投げた。

放物線を描き、それは風香の手元に届けられる。

「僕も、風香がもし意識を取り戻さなかったら、司さんを犯人と思いきむ所だった。重清さんの思惑通りにね」

ずっと、司を怪しいと睨んできた自分が情けなかった。

司はきつと、伊太郎が考えていたよりもっと、複雑、だ。

そんな反省に萎えかけた伊太郎の気持ちを、だみ声が蹴り飛ばした。

「そう。立派な推理ね。証言も証拠もある。重清さん。あなた、最低ね」

柳が重清を突き放すように吐き捨てる。

「そんな。俺は、アンタの為に！」

「お黙り！ 司さんの次は、私を犯人に仕立て上げるつもり！？」

柳は伸ばされた重清の手を汚らわしそうに払うと、いつもの押し付けがましい笑顔で伊太郎の方を向き直った。

「話はわかりましたわ。この重清が全て悪いんですね。私が警察に突き出しますわ。貴方方は宮治さんに……」

「待つてよ」

そのまま重清と去ろうとする、その丸太を伊太郎を思いっきり掴んだ。痛みに柳が声を上げる。

「な、何するのよ！」

「首謀者のあんたが逃げるつもり？ 罪を被せるのが最低なら、あんたは最低最悪だ」

そういうと、伊太郎はそのまま乱暴に、宮治の前い彼女を突き出すように引っぱり手を放した。

柳は勢いに二三歩進み、司と風香の間を割り込むように宮治のベツドの前で立ち止まる。

「僕がね、もう一人いる可能性があると思ったのは、このままじゃ一人足りないからなんだ」

「え？」

柳が振り返る。頬の肉が揺れ、いつの間にかいた汗で髪がそこに貼りついていた。

「早朝の司さんの電話の相手、そして死ななかった宮治の監視役さ」

告白 30

「司、アンタ……」

柳が顔を歪め司の方を睨む。司は申し訳なさそうに唇を結び、俯いた。

「ババア。アンタが初めの計画の破たんを知ったのは、きっとあの早朝の電話だね。アンタの計画じゃとくに手に入っているはずの遺言状がまだないのに、思わず焦って司さんを責めた。でも、司さんは知らないんだ。アンタと重清がわざと宮治さんをこんな状態にしたって言うのを。知れば掌を返す恐れもある。だから、司には自分がここに来るまでは、彼が宮治に付き添い、重清に遺言状を任せると伝えたんだ」

きっと、重清本人からの連絡が来るまでは冷や汗ものだっただろう。いつ、宮治が目覚まし、殺害に重清が絡んでいるか話すかもしれないと思うと。

でも、重清はそれも司に全て被せる準備はしていた。そこで柳は重清の計画にのり、一般病棟に移るのを待って司と付き添いを交代し、行動したんだ。

「ね、司さん。僕、まだ答え、聞いてないです。どうして、司さんは宮治さんの家に今日、現れたんですか？誰に、何を頼まれたんですか？」

「そ、それは……」

「司！」

柳の声が飛ぶ。途端に司の表情は、年端もいかない子どもが酷く叱責を受けたような頼りない顔になり、眉を寄せた。

そして、絞り出した声は。

「伊太郎君、全部、全部、僕が悪いんです。君の推理は凄い。正直、ここまで君が考える子だとは思わなかった。でもね、違うんだ。僕が、みな」

「答えになつてませんよ！ どうして庇うんです！ どうしてこんな奴らを！！」

「伊太郎君」

司は首をゆるゆる振り、頑なに真実を拒否する。

事実を明るみに出すのだけがいい事だとは思わない。

でも、このままなら、宮治の死は、風香の気持ちは、どうなる？  
どうか、どうか宮治が息を引き取る、その前に全てを明らかにしてほしかった。そうしないと、こんなので見送るのなんて……。

伊太郎は自分に鞭打つと、司を説得するように静かに続けた。

「司さんがこの件を知らされてなかった証明も、できるんですよ」

司を追いつめるようでしたくなかったけど。と心の中で付け足す。

「司さんは、僕に言った様に、僕と風香を使って遺言状を探そうとはしていたのは本当だと思う。でも、危険にさらされるなんて思っていなかった。だから、風香が倒れているのを見た時、とっさには嘘もつけなかったし、動揺してたんだ」

あの時の司は明らかにうろたえていた。風香を始末する計画何か知らされていなかったんだろう。さらには宮治の事だって……。

「宮治さんの件も知らなかったはずだよ。司さんは本当の病変で人為的なものとは思わなかったんだ。だって、救急車に同乗して付き合う必要はなかったでしょ。付き添いは重清さんに任せて、さっさと風香に連絡をいれて遺言状を探させればいい。でも、しなかったそれは、本当に心配したからだ」

「心配なんかしない！ 僕は、本当にこいつを、宮治賢を恨んでいたんだ！」

司は声を上げて激しく頭を振る。何かを振り切るように、自分に呪いをかけるように。伊太郎にはここまでする司の気持ちが理解できない。

「どうして？」

風香が震える声で訊いた。司は手を止め、風香を見つめる。

「それは」

やっぱり、嘘なんじゃないか。伊太郎はやり切れない思いに唇を一度噛むと、証明を続けた。

「僕はね、風香からの報告も、遺言状の件を探ったり、体調を管理するためだけだとは思っていないんだ。司さんは本当に、宮治さんを心配してたんだ」

だって、必要ないのだ。毎日、毎日探りを入れる必要何か。重清もいる。変わった事があればすぐに耳に入れられる立場にあった。変わりなくても様子を聞きたがったのは、やはり、それは純粋な心配なんじゃないだろうか。

しかし、司は首を横に振る。

「違う！違う！違う！」

「そうよ。司さん、いつも気にしてた。宮じいがどんなものに食べたかとか、マヒはどうか、そんなだけじゃなくて。何に喜んだのかとか……そう、一番気にしてたのは、どんな思い出話をしたかじゃなかったっけ。それはいつも」

風香の祈るような声に、司はさらに首を振る。

「遺言のヒントを探るためだ！」

「もう、いいでしょ！」

声を上げたのは風香だった。涙目で見上げるその目はまっすぐ司を射抜いており、行き場のない悔しさにその唇は曲げられていた。

「風香、ちゃん」

風香は立ちあがると、否定を止めた司のその手を握った。

「私ね、どうして『大切なもの』って聞いた時、CDだと思ったと思う？」

それは、子どもに謎かけをするような優しい声。風香は目を細め

ると続けた。

「宮じいはいつも言ってたの。宮じいの宝は、バイオリンだって。でも、宮じいはバイオリン持ってなかった。だから……」

だから、風香はバイオリンの音色が入ったCDが『宮治の大切なもの』と思ったのか。

これで、また一つ繋がった。

最後に残ったのは、宮治を、施設を狙った動機だ。

「バイオリン……」

柳の呟きに伊太郎は彼女の顔を改めて見る。そして強い口調で詰問した。

「ババア。アンタ、宮治さんに何したんだよ。どうしてこんな事したんだよ。言つとくけど、アンタだって調べればこの計画にかかわってたのはすぐに証明できるんだ」

「何ですって？」

「一つに、状況。司さんが施設を探りまわるのは共犯のアンタがボランティアの時間だけだ。そうだろう。共犯者が皆を引きつけている時じゃないと、安心して嗅ぎまわれないからね。施設に関わり始めたのもほぼ司さんと同じ。宮治さんが倒れて施設を後に直後だ。二つに物的証拠。通話記録だよ。司さんはこの病院からアンタの所に電話している。調べればすぐにわかるよ」

物的証拠はほぼカマかけに近かった。でも、それを突き付けねば、この強情そうなババアの口は割れないと、伊太郎は踏んだのだ。

そして、それはほとんど有効だったのをすぐに実感する。

柳は顔を歪めたのだ。笑みの形に。

それは醜悪な造形をさらに醜くしていた。しかし、その中にも、もう誤魔化しを止めた潔さがどこか見て取れた。

観念したのかもしれない。もしくは、この段になって、なお、自分の正当性を主張するつもりなのか。

柳は宮治を見下ろすと目を細めた。

「点滴の速度を少し早めただけよ。でも、悪いとは思わないわ。こんなジジィ、くたばって当然なのよ。そう思うから、司も私に協力して遺言状を探す気になった。そうでしょ？ 私たちこそが正当な遺産相続人なのよ。それだけの権利はある。他ののうのと生きてきた人間なんかに渡してたまるもんですか」

「どういう」

今度は相続権を主張するというのか？ 同居をしていた重清がそれを主張するのはわかる。でも、たかだか施設のボランティアに来ていた柳にどうして？

それに、未だにわからない大きな謎がある。

司と重清は彼女のいいなりになった動機、という謎が。

柳は伊太郎がそこまでは推理できていないのを察すると、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「私まで突き止めた探偵ごっこが好きな坊やも、これまでは分からなかったようね。知りたい？ こいつらは口を割らないわよ。宮治に訊けばいいでしょ」

完全に人を馬鹿にした口調に伊太郎は唇を噛む。司と重清を交互に見るも、柳が言うように口を割る気配はない。まるで、それだけは守らねばならないというように。

そこに、伊太郎は切り離せない絆の様なものを感じはしたが、それが何なのかまではわからなかった。

柳がその太い胸を小刻みに揺らし、低い声で笑う。

「それが、できればね」

宮治に……。モニターを見る。命を証明する電子音の間隔はさらに長く、今にもその命が消えゆくのを知らせていた。心音が徐々に伸び、波形の形が変わっていく。

「すみません！」

看護師が急に声を上げ、忙しく宮治の周りを動き始めた。しかし、心音はどんどん伸びて……。

「延命はしないのかよ！ 本当に、良いのかよ！」

伊太郎は重清と司を振り返った。二人ともまるで現実から目をそらすように俯き、一言も発さない。

宮治は恨まれるような何かをしたのかもしれない。命を取り留めても、マヒや痴呆に苦しむかもしれない。命でも、でも、誰か他人の手で強制終了させられるほどの罪を持っているのか！？

「宮じい！」

風香が宮治の手を握ったまま叫んだ。その時だった。

伊太郎は、見た。風香の掌が僅かに光り、宮治の中に吸い込まれていくのを。

「……あなた」

晴美が目を見張る。そして急いで看護師の方に目をやった。看護師は頷き、モニターを操作する。そして、奇跡は再び起きた。

「……ふ……か？」

「宮じい！」

宮治が目を覚ましたのだ。しかも、その目にはハッキリとした意志の輝きが見て取れ、しっかりと風香を捕えている。

「そんな」

柳が愕然とした表情で頬の肉を震わせた。

何が起こったのわからない。でも、晴美といい、風香といい、今の光といい、今日は奇跡が起こる、そんな日なのかもしれない。とにかく、この奇跡が終わる前に、現実をどうにかしないと。

伊太郎は興奮と混乱に騒ぎだす胸を押さえると、宮治の元まで歩み寄り、その双眸をとらえた。

宮治は伊太郎の影に気がつく、その目に深い悔恨と確かな意識を持って見つめ返す。

伊太郎はこの事件の本当の原因、それを明らかにするために問うた。それが、きっとこの老人が意識を取り戻した理由なのだと信じながら。

ひざまづき、宮治に視線を合わせる。

それは、神の前に告白する者と同じ姿勢だ。ただし、今、告白するのは、この老人の方だが。

「宮治さん。この人達を、知ってますね？」

宮治は一度目を細める。そして、柳、重清、司の順に視線を巡らすと、その事実を自分自身で噛みしめるように頷いた。

「あ。  
あ。  
私の娘と、  
私の孫たちだ」

やはり。

伊太郎はさっきの司の表情を思い出して視線を落とした。

自分と似たあの司の表情。あれは、迎えを待つ者の顔。自分が忘れられていないか、心配し、寂しさと不安に耐える顔なんだ。

あれを見た時、そして柳とのやり取りで、そんな気がしていた。

宮治は言葉を無くす柳の方を見た。

「お前は、里美だね」

柳は押し黙る、何度か唇が『今更、今更』呟きの形に動いてから、吐き捨てたのは違う言葉だった。

「そうよ。私と司の母親、里香は宮治に捨てられた家族なのよ。そして」

柳は生ゴミでも見つめるような目で振り返る。

「重清は私の子ども。司は私の姉、里香の子どもよ」

「え……」

風香は目を丸め皆を見つめる。そう、彼らは皆、親族だったのだ。つまり柳は司の叔母であり、重清は従兄なのだ。

柳は再び宮治に視線を戻すと、憎々しげに声をうねらせた。

「こいつはね、私達の母親を捨てたの。他に女を作ってね。牧師？笑わせるわ。とんだ生臭坊主よ」

「里美」

宮治がかすれた声で、その名を呼ぶ。しかしその心までは届かない。娘、柳里美は積もり積もった恨みを吐き出し続ける。

「母は私達を抱え、必死で女で一人で育てた。でも、無理がたたつてね、私達が幼い頃に死んだわ。私と里香は里子に出された。わかる？ 幼い頃に父親に捨てられ、母親に死なれ、他人に預けられた子供、の気持ち」

だから、柳は施設の子どもたちをしきりに可哀想と言っていたのか。

その歪んだ劣等感は、伊太郎にもわかる気がした。同じ立場だというのを認めたくない。でも事實は曲げられない。そう言った時、人がとる態度は一つ。相手を見下し、虚構の優越感に浸るのだ。

伊太郎が皆と馴染まなっていたのも、柳が可哀想がっていたのも、同じ気持ちだったという事だ。

伊太郎はいたたまれない気持ちに、沈黙した。

「すまなかった」

「今更遅いわよ。私はその後もまともな人生なんか歩めなかった。父親の影ばかり求めた私はろくでもない男に引っかけたね。見てよ！ こんなるくでもない役立たずのガキまで作らされて」

柳は尚も謝罪を撥ね退ける。そして飛んできたその言葉に、宮治だけでなく、重清もまた心を抉られ身を小さくした。

「でも、重清さんは、施設にいたんじゃない」

風香の言葉を、柳は鼻で笑い飛ばす。

「施設に放り込んだわよ。こぶつきじゃまともな人生歩めないものでも、結果は同じよね。親に捨てられた子どもは、どうせまともには生きられないのよ。けどね、こんな私にもようやく神様は味方してくれたの。重清がいる施設のオーナーの名前を見た時、震えたわ。笑わせるじゃない。女作って自分の子供を捨てた男が、児童養護施設のオーナー！？　それでね。思いついたのよ。私はこいつの娘よ。財産くらい貰っても構わないって事にね」

悔しかったのだろうか。

伊太郎はわめき散らす柳の背中がどんどん、幼い少女のそれに見えてくるのを感じた。

父に棄てられ、里親ともうまくはきつと行かなかったのかもしれない。

自分の不運を誰かのせいにしないでやってこれなかった哀れな女の子。

そんな彼女が、自分を捨てた父親が、他の子どもを育てている。しかも赤の他人の子をだ。それを知った時……心は軋みながら歪んでしまったのだろう。

伊太郎は溜息をつく、司の方に向き直った。

「司さん。貴方のお母さんは？」

「……もう、ずっと昔に亡くなりました」

司の横顔は涙の流せない泣き顔だった。そこに他人を攻撃しない

と、自分の抱える痛みには耐えられないのだと叫ぶ声が飛ぶ。

「そう！ その話を聞いた時もね、司、あんたに同情したふりしたけど、本当はせいせいしてたのよ」

「え」

司が顔を上げる。

「私、大嫌いだっただの！ 私と違って顔がよくて、いつもちやほやされてたアンタの母親がね。同じ姉妹で、この男はね、顔の綺麗な姉ばかり可愛がった。その証拠に別れる時も、姉にだけ自分の使っていたバイオリンをやってたの。アンタが毎週末あれを弾く度に、頭がおかしくなるくらい憎しみを思い出していたわ。アンタの母親へのね」

「バイオ……リン？」

司は目を瞬かせた。

「私を差別して捨てたこいつにも、一人いい思いした姉にも、同時に復讐してやろうと思ったのよ。それで、アンタを見つけ出して、この計画を持ちかけたわけ。馬鹿よね。単純よね」

柳はそういうと、両手を胸の前で組み、小馬鹿にする口調で演技を見せて見せた。

「『私も重清も、辛いばかりの人生だったの。ね。せめて本当の父親の気持ちを受け継ぎたいの。娘と孫として。施設が第三者に渡るのなんて耐えられない。でも、今更父の前にも出られない。だから、

権利書と遺言状を探し出して。遺言状さえなければ、別れた妻の子でも自動的に私のものになるの。ひいては、重清のためにも。私と重清は血のつながったあなたの家族なのよ」

そして再び、憎らしい表情に戻ると、司を覗きこむ。

「そうやって泣きつけばコロッと騙された」

「叔母さん。僕は……」

「ばーか。私はね、初めからアンタに罪を被せて、遺産を独り占めするつもりだったのよ。あ、訴えようだったって無駄よ。この男が権利書や遺言状を探したり、このバカ娘に探らせ、重清と連絡を取っていた。それらが皆、示すのはアンタ一人よ」

柳は得意そうに言うと、そういつて腹をゆすぶり高笑いした。

## 告白 33

確かに、もし、何らかの捜査が入ったら、証拠が示すのは全て司だ。もしこれで、風香殺しの容疑者に仕立て上げられていれば、完全に司が首謀者って事になってただろう。

「司さん！ いいの！？ このままで」

こんなの、理不尽だ。

もしかしたら、司は死んだ母親を柳に、自分の寂しさを重清に重ね、助けたいと思ったのかもしれない。

風香と同じだ。

そうやって誰かを助けることで、自分がここにいるのも良い、そんな実感が欲しかったのだろう。

でも、それでも、どうしても納得できない。

伊太郎は司に掴みかかった。しかし、司はやはり首を横に振った。

「いいんです。僕は……僕の母親も、確かに恵まれた人生だったわけじゃない。母もこの男のせいで深い傷を負っていた。母を捨てたこの男を恨んだのも、本当だ。母はどうかかわらないけど、少なくとも、僕はね。けど」

司は宮治を一瞥してから、重清を見つめた。その目には優しさ以上の温もりが込められている。それは肉親と呼ばれるものにのみ注がれる、理屈のない類の物のように、伊太郎には思えた。

「僕はまだ幸せだったんです。父と母が事故で亡くなるまでは、ごくごく幸せだった。バイオリン……母は音大にまで行ったんですよ。父とはそこで出会ってね。おかげで僕の小さい頃はバイオリン漬け

だった。苦しいと思った事もあったけど、両親を失った後、このバイオリンがあつて良かったと思つた。僕には愛された記憶がまだある。でも、重清と柳さんには……」

「だから、だから、手を貸したの？」

風香が独り言のように呟いた。司は力なく頷く。

「財産がどのじゃないんだ。誰だって、親と繋がっていた証拠が欲しい。そうじゃないか？ だから母親の分まで、柳さんにも、そして従兄の重清にも幸せになってほしかったんだ」

司は両親を失い、思いがけず出てきた親戚に強い想いを抱いた。そして、自分は利用されているのではと思いつつも、母親が果たせなかった父への想いを、柳にスライドさせて叶えさせてやりたい。そう思つたのだろう。

伊太郎は言葉を失くした。

自分はこんなに、人の事を考えたことなんかない。いつだって、窓の傍で迎えを待っていた。

迎えに來ない母親を恨みかけてもいたくせに、最近はその顔を忘れつつもあつた。

一人、悲しみに浸つて、そんな自分を見て痛みを覚える他の連中の気持ちも考えなかった。自分に声をかけ続けてくれる風香の気持ちにすら、応えようとしなかった。

ずっと、独りよがりな哀しみに閉じこもり、その実、きっと気持ち良くなっていたのだ。

柳と一緒にだつたな。伊太郎はもう、誰も責める気にはなれなくて、肩を落とした。その時だつた。

「お前の」

足元からの低い声。空耳かと思うほどのそれに伊太郎が目を向けた。

瞬間、大きな影が動いた。同時に心の底から絞り出されたような怒号が病室に響き渡った。

「お前のそんな所が、大っ嫌いなんだよ！」

「重清！！！」

司の悲鳴に近い声が上がる。床が蹴られる。誰かの悲鳴が上がった。

そして、重清の拳が唸りを上げ、司に向って放たれた。それは、誰の目にも確認できない動きだった。重清の拳が司をとらえる、その数瞬間、二人の間に影が割り込み、重清の手を叩き落としたのだ。

「お止しなさい」

乾いた音が鳴り、重清が勢いあまって前のめりに転倒する。

重清の拳を叩き落としたのは、それまで沈黙していた晴美だった。

「晴美さん」

風香と伊太郎は彼女を驚きの表情で見つめる。しかし、晴美は造作もないと言わんばかりの顔で、腕を組んだ。

「暴力は、駄目よ」

無様な格好に転倒した重清は、唸り声を上げると顔を赤くして振り返り、晴美の向こうの司を睨みつける。

「くそ！馬鹿にしゃがって！ 見下しゃがって！」

床を何度か大きなその拳で殴ると、奥歯を噛みしめてから再び口を開いた。

「お前、いつつも俺の事『可哀想』って思ってたんだろ。なあ。ちよつと綺麗な顔してるからって。大学まで出たからってさあ。俺だって馬鹿じゃない。知ってたよ。お前が知って利用されているのみな。俺はな。お前が俺達を庇えば庇うほど、惨めな気持ちだったんだよ！」

「重清……僕は」

「俺を馬鹿にするなっ！」

愛情と同情、寄り添いと施し。その違いはほんの些細なものかもしれない。与える者、受け取る者、その両方の視線が同じ高さでないと、思いは絡まり、ねじ曲げられ、どちらも傷つける事にもなりかねない。

伊太郎は、重清の気持ちもまた、わかる気がした。それが卑屈な思い違いだとしても、それは確かにある気持ちなのだ。

「すまなかった」

司は眉をよせ頂垂れる。

彼も悪気があったのではないのだ。ただ、善意が人を傷つける場合だってある。それに、彼の場合は。

やっぱり、罪なんだ。人に劣等感を与えるその容姿は。

伊太郎がそう苦笑しかけた時だった。すぐ隣の影が立ち上がり、

声を上げた。

「なによ。ババアも、重清も。なんかムツカツク！」

「風香！？」

今の今まで大人しくしていた風香だった。

風香は重清と柳を交互に睨みつけると、それまでの沈黙をとり返すように言葉のマシンガンを撃ち始めた。

「ばっかじゃないの！ 自分の不幸を人のせいにはっかりしてさ。世の中、不公平にできているのなんか、常識だつつの。それを、なに？ 捨てられたから？ 不細工だから？ 馬鹿らしい！ そうやって何かのせいにして文句垂れているのが、自分をどんどん惨めに行っているのに気がつかない？ 本当は、ババアも重清も、司の優しさに気がついていたんでしょ。卑屈な考えしてるから、そうなるのよ。頭冷やしなさい。司さんは、知ってて、協力してた。きつと財産だつてみんなあんたらにあげるつもりだった。罪も問われるなら一人で被るつもりだった。これが、見下してる人の態度にしか見えないなら、あんた等の目の方が腐ってるのよ！それにね……」

マシンガンは止まりそうになかった。それを止めに入っただのは、やはり晴美だった。晴美は「もう、いいわ」と優しくいなすと、風香の唇にそつと人差指をあてた。

手袋越しでもうかがえるその細い指は、魔法でもかけたかのように風香の口に鍵をかけた。

そしてすぐに重清を振り返ると、目線を合わせるようにしゃがみ、固く閉じられた重清の拳を包みこむように両手で握る。

流れるようなその動きに、その場にいる者は皆、彼女に釘付けになった。もしかしたら、魔法をかけられたのは風香だけじゃないのかもしれない。

自分も、皆も、晴美の魔法にかかり、口を閉じて彼女の行動を見守らされている。伊太郎はそう感じながらも、事の行方を静観した。

その晴美は、しばらく重清の、その拳を温めるように黙って握りしめていた。が、ふと吐息を漏らすと目を細め、囁くように言葉を零した。

「もういいでしょ？ 重清さん」

それは本当に短い、ありふれたフレーズだった。

でも、不思議と心の奥まで入り込み、じんわりと冷えた部分を溶かして行くような声だ。

重清の頬に涙が一筋零れた。

伊太郎は、本当に魔法を見たような錯覚を覚えた。あんなに荒ぶっていた重清の表情がみるまに静まって行く。まるで、彼の心が解されるのを目の当たりにするかの様だ。

重清の拳はやがて、ゆっくり解け、彼は力なく壁に背を預けた。

そんな柔らかな空気に、冷や水を被せるような声がした。

「何よ。あんた。他人のくせに出しゃばって」

柳だ。晴美は振り仰ぐと、立ち上がり柳を正面から見据え、目を細めた。

「そうね。他人だから、この役目は出来たのかもしれないわね」

役目？伊太郎は首をかしげ風香を顔を見合わせる。やはり、彼らにも目的があったというのか。

晴美はそんな二人の気持ちを看透かしたように、彼らに一度頷く。そして、宮治を一瞥してから、声をやや張り、皆にこう告げたのだった。

「昨日、私達が宮治さんのお宅にお邪魔したのは、彼が忘れてしま

う前に、彼の口から直接、罪の告白を聞くためなんです」

「告白？」

柳は、まるで見当違いの答えを聞いたかのような、妙に裏返った声で首を傾げた。それを晴美は穏やかな瞳で受け止め、頷く。

「ええ。二人の人から依頼を受けてね」

二人。誰だ？

依頼。何だ？

伊太郎は彼女の顔を見るが要と知れない。わかった事は、彼らもまた、嘘ではないのかもしれないが、本当の事を語っていなかったって事だ。

晴美は一度、宮治に視線を送る。宮治は彼女に代弁を頼むように顎を引いた。

彼女は彼の意味を汲むように、何度か小さく首を縦に振ると柳に再び視線を合わせる。

「そして、昨日、お話を伺いました。宮治さんはね、貴女や里香さんの事を忘れてなんかなかったわ」

「そんなはずは」

柳はわななく唇で零す。

信じたくて、信じたくない言葉だ。

頑なに宮治は自分を捨てたと思い込んでいた。それを恨むことでも、忘れたやっただけ。信じてしまえば、この基盤が揺らいでしまう。でも、忘れられてなどなかった。それが事実なら……そうどこかで望んでしまう気持ちも、伊太郎には痛いほどわかる。

「信じられなくて、当然かも知れない。でも、どうしても、早まったの。こんな事しなくても、あの施設は『娘』に譲るつもりだった」

「『娘』って」

柳が宮治の手を握ったままの風香を一瞥した。風香は肩を震わせ、柳を見つめ返す。

しかし、晴美が伝えたのは違う真実だった。

「本当の娘は、貴女がただけなのよ」

「……」

柳の頬に僅かに赤味がさし、風香が一瞬、なにかの痛みに耐えるような顔をした。

風香。

伊太郎は彼女に呼びかけたかったが、その先に言葉を続ける自信がなくて口を噤んだ。何と声をかけていいのかわからない。

こう言う時にも、なにか一歩足りないまだ子供の自分の手の短さに、歯がゆくなる。

そうしている間に、風香はすぐに表情を改めると、何も言わず、柳と晴美の会話の行方を再び見守り始めた。伊太郎は仕方なく、結局何も言わないまま、それに倣った。

晴美は、柳の表情が僅かながらにほぐされたのを見出したのか、彼女を包みこむような笑みを浮かべ、そしてどこに用意していたのだろう、彼女の前に黒いケースを差し出した。

「これ。今日、施設を伺ったのはこれを受け取るためなのよ」

「バイオリン」

司が目を少し見開く。そう、晴美が手にしているのはバイオリンのケースだった。そしてそのバイオリンは、たぶん、宮治が司の姉に贈った物のはずだ。

「柳さん。バイオリン。お姉さんに預けたのはね……」

その時、ぱあっと伊太郎の思考の断片に光が当たった。まさにそんな感触に、思わず伊太郎は声を上げた。

「遺言状」

そうだ。宮治は別れ行く娘へのせめてもの愛情として、彼女達に何かを残そうとしたのではないか？

大人の都合で離れる事になってしまった若い娘達。せめて君たちは捨てられたんじゃない。大人の勝手で寂しい思いをさせるが、自分の心は常にもにある、そう伝えたかったのかもしれない。

そして、別れる時に少しでも大人に近い、姉の方にそれを託した。

伊太郎はそつと司の方を伺う。

司は重清と違って、両親に愛されて育った。これだけが原因とは言えないが、やはりそれは父親に捨てられたと思い込んでいた柳と父親の愛をなにかしら感じた司の母親との違いに起因しやしないだろうか。

司の母親がどんな人で、どんな風に父親にトラウマを抱えていたのかは知れない。司が母親に同情するほどの傷を負ってたのも事実だろう。

だから、司の気持ちも複雑だったのだ。

宮治は母に傷を残した人物。でも、身内の愛情を感じて育った司は、宮治を恨むと同時に、やはり愛してもいた。面識も、思いでもないとしても、血の繋がりは家族を認識させていたのかもしれない。

その繋がりを象徴するものが、バイオリン。

一つでも繋がりをを感じるものがあつた姉と、何も手元になかつた妹では、生きる道も違ってくるのは、そう荒唐無稽な話でもない気が、伊太郎はした。

司はバイオリンに由来については知らなかつたようだ。でも、知らなくても伝わるものは、あつたのだろう。

「そん、な」

呆然とする柳の前で、晴美はバイオリンケースを開けると、丁寧に中のバイオリンを取り出し、司に渡した。それから、宮治に了承を問うように視線をやり、彼が頷くのを見てから、ケースの底に手をやる。

「あ」

誰の声なのだろう。伊太郎も声を上げてしまったかもしれない。ケースの底は外れ、その奥から白い封筒が出て来たのだ。

どうやら、二重底になっていたらしい。

あれだけ彼らが探し回っていた遺言状は、彼らのすぐ傍にあったのだ。自分達の存在を宮治が忘れている、自分達より他の子どもを大切にしている、そう思い込んでいた人間の目には見破る事の出来なかった、その場所に、宮治の気持ちはいつもあった。

「読んでみなさい」

晴美はそれを取り出すと、柳の方に差し出した。

白い封筒は、縁が変色していて遠い過去から途切れることなく息づいていた、宮治の娘達への愛情が、確かに存在したのだと物語っているようだ。

柳は震える手でそれを受け取ると、ゆっくりと開いた。

何十年前に綴られた文字が、読まれるべき人に、今、読まれる。

柳は視線を何度も往復させながら、みるみるその表情を崩して行った。頑なな卑屈と寂しさを張りつかせた大人から、思い募らせた生き別れた父にようやく会えた幼い少女の頼りのないものへと。

「嘘でしょ」

柳は読み終わると遺言を握りしめ、宮治の方に振り返った。  
宮治は、娘の悪戯をいなすような、父親の眼差しでただ、一つ頷く。

一気に、柳の瞳から涙が零れ落ちた。

「嘘……お父さん！」

伊太郎は慌ててその場所を開け、柳がそこに滑り込む。そして宮治の手を、両手で握りしめた。

「あ、あ……本当に忘れては……」

長年、心を凍りつかせ歪めていた寂しさが溶け出したかのように、柳の頬を涙となって伝っていた。

宮治はその手に自分の手を重ねると、娘を見上げ、感情に詰まる喉を震わせた。

「里美、重清、司、辛い思いをさせて。すまなかった」

柳が泣き崩れる。

重清と司は顔を見合わせ、同時に宮治の元に駆け寄った。

伊太郎は一步離れた所から、そんな4人を見つめた。

よかった。長年の思いのすれ違いは解消され、ようやく家族が出逢う事が出来た。家族に恵まれなかった彼らの誰も、もう、寂しい思いをこれから先、感じずにすむ。

本当に、よかった。

心からそう思った。

その時、自分の腕が軽く引かれるのを感じ、伊太郎は振り返った。

見ると、風香だった。

風香は鼻の頭を少し赤くし、顔を伏せたまま短く、言葉を噛み切った。

「行こう。伊太郎」

「風香」

伊太郎の胸が軋んだ。

複雑なのだ。風香は。

風香にとって、宮治は家族だった。

でも、それは結局、血族の前では、施設のオーナーとその施設の子どもという繋がりでしかない。

どれほどの時を共有し、どれほどの言葉を交わし、どれほどの気持ちを書いでも、それは親族の一時に勝てない時もある。

認めるしかないのだ。この現実を。

伊太郎はいたたまれない気持ちで、病室を黙って出て行こうとする風香の横顔を見た。

その時だった。それまでここでは一度も聞かなかった声がした。

「もう少し待ってください。宮治さんの罪の告白は、これだけじゃないんです」

「!」

風香と伊太郎は驚いて振り返る。

彼らを止めたその声の主、空知神父が晴美の隣に立っていた。

告白 36

まさに忽然と現れた彼に、二人は目を見張る。

「！？いつからここに！？」

「初めからですよ」

神父はそんな事は重要ではないと言わんばかりに、飄々とそういつてのける。伊太郎の背を軽く押す。

「晴美さんが君をここに連れて来たのは偶然でも、成り行きでもないんですよ。君は第三者じゃない」

「は？」

さっぱりわからない。自分の家族は真正正銘、ちゃんという。宮治の親族であるわけがない。じゃ、何？

頭の中に疑問符が次々に浮かんで飽和状態になりそうだった。そんな伊太郎を、神父はベッドサイドに固まっていた三人をかき分けてまで宮治の傍に連れて行った。

「ありがとうございます」

宮治の言葉に、神父は首を横に振り「すべては神の思し召しです」と答える。

老人は深く頷くと、伊太郎を見上げる。

「伊太郎君」

その目には、昨日、彼にあつた時に見た、憐れみが今も見て取れ、伊太郎は不快に目を反らす。

「私は、君にも謝らないといけない」

宮治はしわがれた声でそう言う。でも、伊太郎には本当に心当たりがなく、どう答えていいのかわからなかった。

自分に謝る？このゴタゴタに巻き込んだ事なら、自分より風香に謝るべきだ。

伊太郎は眉を寄せると「何のことですか」と口の中で呟くように言った。

宮治はそんな少年の横顔を見つめると、言葉を選ぶ余地がないことを観念したのか、ため息交じりに彼の問いに、こう答えたのだった。

「君のお母さんの事だよ」

伊太郎は顔を跳ね上げ宮治を見つめる。

母親の事！？

3年したら迎えに来ると言つて、5年経つた今も連絡一つよこさない母と宮治になんのつながりがあつたというのか。

混乱した。

全く心当たりもなければ、推測する情報もない。

知識も何も役には立たない。

伊太郎は老人を見つめると、息をのんで次の言葉を待った。

宮治は目を細め、伊太郎を労わるように静かに続ける。まるでそれはこれから話すことの覚悟を、伊太郎にさせるような口調だった。

「きつと、春には、迎えに来ると思う。でも、君には厳しい現実が

待っているかもしれない」

厳しい現実？

振り返り、伊太郎は説明を求めるように風香や神父、晴美を見る。しかし風香は首をかしげ、他の二人は宮治からきけといわんばかりに口を閉ざしてなんの反応も示そうとはしなかった。

柳達も同じ態度だ。

伊太郎はしかたく再び視線を宮治に戻した。

宮治は伊太郎をあの目でじっと見る。

言いがくねる理由が声を奪っているかのようだ。しかし、その間えはため息にやがて変わり吐き出され、ようやく宮治は伊太郎に向けた言葉を彼に差し出した。

「君のお母さんはね」

宮治の声が澁み、そして静かに告げる。

「今は服役中なんだ。そして、君のお祖母さんはもう……」

「母さんが……」

全てが語られずとも、伊太郎は全てを察した。

強い風の中に立つようにギュツと目を瞑り、俯く。

言いようのない胸の苦しさに息が詰まる。が、驚きはなかった。

そう、哀しいほど伊太郎は驚かなかったのだ。

なぜなら、この事はどこかで予想していたから。

まだ中学生の伊太郎が、脳梗塞や遺言の知識を持つようになった、そのきっかけ。それは単なる興味ではなく、必要だと思ったからだった。

調べ始めたのはそう、約束の3年が過ぎ始めた頃だった。

遠い遠い記憶の中に、何かしら勘が囁きかけるものがあつたのか  
もしれない。

「私は。君のお母さんが君を預けに来た時、お婆さんを手にかける  
かもしれないと感じていた。彼女の覚悟も感じていた。でも、止め  
られなかった」

「ええ。わかります。なんとなく」

「どういう事？」

風香が棘のある言葉で伊太郎を射抜く。伊太郎は他人の身で宮治  
を世話していた風香の顔を、見る事が出来ない。

家族だからこそ許せることと  
家族だからこそ許せないこと

晴美はさつき言った。

他人だからできるのかもしれない

確かに、そう言う事はあるだろう。

「僕の祖母もね、脳梗塞で寝たきりだったんだ」

伊太郎の祖母は、宮治と同様に脳梗塞で倒れ、麻痺や痴呆を抱え  
る身だった。宮治と違うのは、それがさらに重度でその世話をする  
のが嫁という名の他人だった事だ。

仕事を理由に壊れゆく母親から逃げていた父親の分まで、母は献  
身的に尽くしていた。

しかし、痴呆は日に日に酷くなり、人格が変わっていく祖母に辛く当られる毎日だった。罵られ、暴力を振るわれ、食事や便尿をまき散らされ……。

10歳の伊太郎が見ても理不尽と思うのだから、きつと実際はそれ以上の状況だったのだろう。

そんな記憶があるから、風香が宮治の世話に行っているのは気が知れなかった。家族でもあんな苛酷で辛いもの、よく引き受けるなと。

自分ならできない。そう思っていた。

ここに預けられた時、理由は知らされなかった。始めは本当に分からず、置いて行かれた事に混乱した。

しかし、少しずつ大人になっていくうち、母は育児と介護の両立が出来なくなったのではないか。そう思うようになった。

だから、せめて、母の何らかの力になれるようにと祖母の病気を調べ、何らかの形で報われればいいなと遺言や相続の事を調べ上げたのだ。

自分は他の子どもたちとは違う。いつか必ず母が迎えに来る。

だから、その時はもうお荷物の子どもなんかじゃなく、母を助ける家族になっていよう。

ずっと迎えをそうして待っていた。

でも、今、宮治から事を聞かされても、驚かなかったって事は、自分はどこかで予感していたのかもしれない。気づいても気づかないふりをしたのは、母の為じゃない。自分が傷つきたくなかったからだ。

伊太郎はふと力を抜くと、現実と向き合うように目を開けて宮治を見つめた。

「それで、母の服役中の間も、僕は施設にいる事になったんですね」

「すまなかった。伊太郎君」

「話してくれて、ありがとうございました」

そういう伊太郎に宮治は、ようやくほっとした顔を見せた。

胸の内に秘められた罪は、他人が思うよりずっと本人を苦しめ続けるものなのかもしれない。

それを宮治は今、痴呆という形で忘れ、許される機会を永遠に失うその前に告白できたのだ。

神父がそこに進み出て来た。彼は先ほどの伊太郎と同様にひざまづき、宮治の手を取る。

神父は低く柔らかな声で罪を形にする。

「宮治牧師の罪は、家族を捨てたこと。伊太郎くんの母親の罪を止められなかった事」

そして罪は今、本人につきつけられ、その過ちを認められる。

神父はそんな告白を終えた咎人に、雪解けを誘う春の陽光のような笑みを、向け、そして厳かな口調でこう告げた。

「しかし、今、全ての告白は聞き届けられ、罪は神の元に赦されました」

罪を察していて止めなかったのも罪。

それが相手を想うからこそその事だとしても。

なら、僕も、司さんもみんな同じ罪だ。僕も、告白しないといけなくなる。

伊太郎は正しい、間違っているその二色だけでは塗り分けられないこの現実には長い溜息をついた。

そんな少年の肩に、そっと手が添えられた。

見ると、晴美だった。

晴美はまたもや、伊太郎の心中の言葉をくみ取ったかと言つように頷くと、こつ耳打ちした。

「アナタの告白も聞き届けましたよ」

と。

## 告白 37

季節はあの日から冬を越え、春に差し掛かるうとしていた。

伊太郎は国道沿いのあの道を、風香と自転車走っていた。宮治が退院し、新しい生活が始まるのを祝うために尋ねていたので。

思いがけず長居をしてしまい、時刻はとくに門限を過ぎて夜中といえる時間に差し掛かっていた。泊って行くように引き留められたが、風香が帰ると言ってきかなくて、今、こっやって白い息を飛ばしながらペダルを漕ぐはめになっている。

まだまだ冬の気配が色濃く残る風は海のそばと言うのも相まって、身を切るように冷たかった。

伊太郎はあの日、宮治の告白を受けてから風香と一緒に病室を後にした。

なんだか脱力してしまい、二人で病院のロビーで缶コーヒーを飲みながらぼんやりしていると、晴美達が女性を一人従えてやって来た。

服装が変わっていたのでわからなかったが、よく見るとあの病室にいた看護師だった。

三人は伊太郎と風香に「お疲れ様」と声をかけると、食事に誘ってくれた。

昼もろくに食べずにいた伊太郎と、元来食い意地の張っている風香は一にもなくその誘いに乗った。

連れて行かれたのは、近くの洋食屋だった。

斜めに差し込んでいる陽が、自分達の呆けていた時間の長さを教えていた。夕食が入らなくなるという心配は、成長期の二人にはなかった。遠慮なくご馳走になる事にした。

それにしても、気になるのが、この看護師と依頼についてだ。

彼らがもう、まともと言っては少々失礼だが、非日常的な目的で

行動しているのは明らかだった。この看護師はもしかしたら仲間かなにかで、あのモニターを操作していたのかもしれない。

つまり、宮治の心停止はダミー。

そんな事を考えてオムライスを口に運ぶ伊太郎に、晴美は「大当たり」といって微笑みかけた。

もはや、伊太郎は彼女が心の声を聴ける能力の持ち主だという事に、確信を持っていたので、心の中で「やっぱりね」と返す。

その反応が晴美は気に行ったのか、嬉しそうに目を細め「モニターはベッドの下に隠れていた空知神父につけていたんですよ」と種明かしをするようにそつと告げた。

その一言が逆に伊太郎を混乱させたが、神父の方を見ても、偽看護師の方を見ても教えてくれそうにはなかった。でも、晴美に特殊な能力があるというのなら、彼らに何かしらの能力があってもおかしくないのかもしれない。

「ね？ 何の話？」

風香が二皿目のスパゲティを平らげて口を拭きながら聞いてきた。食べている時は大人しい彼女も、食事が終わればその口はまた、お喋りの為に動き出す。

伊太郎は説明が面倒で「別に。デザート頼めば？」とおごりであるのにも関わらずそう言ってみた。真に受けた風香は無遠慮にメニューを捲り始める。

伊太郎はスミマセンと、神父に視線を投げながら、口には違う言葉に乗せた。

「あの、どうしても気になるんですけど」

能力の事も聞きたいが、一番は依頼人と依頼内容だった。謎が結局自分の推理の他の所で帰結したのが少し悔しくも、なん

だかしつくりこなくもあつたからだ。ならば、せめて解法を自分にもわかるように説明してもらいたかった。

神父は頷き。

「依頼はお二人。宮治さんの奥さんと、司さんのお母様からです」

「は？どっちもないじゃない」

風香が顔を上げる。しかし、神父はまた頷き。

「私達は、そう言った方々から依頼を受けるのを仕事にしているのです」

そう言った。死者からの依頼。きっと神父という職業の人間が言わなければ、簡単には信じられなかったかもしれない。いや、仮に神父としても、以前なら笑い飛ばしただろう。

でも、伊太郎にはこの説明で、全てがすっきりした気がした。

伊太郎は無神論者であると同時に、幽霊だの死後の世界だの信じた事はない。でも、ここではそれがあると仮定する。

宮治の妻、つまり後妻は夫が罪を抱えて生きていくのをずっと見ていた。罪は、告白通り、家族を裏切った罪と伊太郎の母親の犯罪を見逃した罪だ。痴呆でその罪を忘れて、赦しを得られる機会がなくなるのを、たぶん一番恐れていたのは宮治自身だ。だから、彼の代弁を彼の亡き妻が果たした。

司の母親については、遺言状だ。妹と息子が遺言状に気がつかず、犯罪に関わろうとしている。きっと生きていれば、いずれは話したであろうバイオリンケースの秘密を話せずに事故で他界してしまつた彼女は、そのことを伝えてほしかったのかもしれない。

全ては、想像だし、信じ難いけどね。

伊太郎は肩をすくめながら晴美の方を「こんな感じでどうですか

？」と見る。自分でも声にしたのかしなかったのかわからない。

でも、晴美は「また大あたりよ」と快く頷いた。

一方、デザートをちゃっかり注文し終えた風香は「なにそれ」と面白がって三人の顔を覗き込んでいる。

「じゃ、幽霊の願いをかなえるのが仕事？」

「亡くなった方だけでなく、声を上げたくても上げられない人の代弁が仕事です」

「へ」。面白そうじゃん」

どこをどう、面白いと思ったのか、伊太郎には分からなかったが、今や三人の興味が風香に向いているのはわかった。

晴美がずっと沈黙していた偽看護師に目くばせする。

偽看護師が頷く。

晴美は確認するように風香に問うた。

「貴女、一度死にかけた事、あるわね」

「は？私が？」

ありますとも。

伊太郎は代わりに答える。ただし心の中で。

口にすれば風香は誰に殺されかけたか知る事になるかもしれない。それは不必要な事に思われた。

晴美は伊太郎のその声を聞いたらしく、伊太郎の方を見ると一度頷いて、再び風香の方を見た。

「もし、貴女が私達の仕事に興味があるのなら、一度いらっしやい

な。うちに」

「え？ いいの？」

風香の顔がぱつと輝く。

晴美は頷く。

伊太郎は思い出す。宮治の意識を取り戻させたあの風香の掌の光を。

もしかしたら、風香も……。

そうして、季節は過ぎた。

伊太郎は少しずつ、殺人者、しかも身内殺しの息子であるという現実を受け入れ始めていた。

警察の追及が自分に及ばなかったのは、事件当時すでに施設に入られており、警察の伊太郎への面会を宮治が頑なに拒否していたからというのも、母親がすぐに罪を認め、控訴もせず、求刑通りの罰を受け入れ裁判がすぐに終結したという事も、父は離婚し3年前に再婚し別の家庭を持つているという事も……。

窓際で外を眺めていただけの少年の目に映らなかった現実は、遺産相続よりもいとまたやすく調べる事が出来た。

母は宮治の言うとおり、春には執行猶予つきで出所するそうだ。一緒に住むかどうかは決めていないけど、高校受験の結果がもうすぐ出る。そしたらその報告がてら面会くらいはしに行こうと考えていた。

「ね。ちょっと付き合ってくれない？」

風香がそう言うと、伊太郎の返事も聞かずハンドルを繰って横道にそれた。国道沿いにあるコンビニに滑り込み、自転車を止める。

「なに？　買い物？」

「うん。ちょっと」

風香は珍しく言葉少なに返事すると、さっさといつ来ても変わり映えのない空間へと先に身を投じてしまった。

落ち込んでいるんだろうな。

伊太郎はその背中について行く。

宮治はあの後、あの告白が嘘のように再び意識レベルを落とした。麻痺も今度は嚥下機能にまで及び、呂律も回らない状態だ。痴呆も酷く、一日中ぼんやりといった感じた。

もう、風香の事も覚えていない。

覚えているのは同居を決めた、司の事と柳や重清の事くらいだ。

あの時の光は、やはり風香の起こした奇跡だったのかもしれない。風香も、晴美達の様な能力が……そうでなければ説明はつかなかった。

非現実的な事象に回答を求めるのは、いささか本意だったが、自分の知っている現実なんて、世界のほんの断片でしかないことは母親の件で思い知った。

こう言う事もあってもいいかもしれない。

それに、何より、今、風香を落ち込ませているのはこれだけじゃないのだ。

「シスターってさ、結婚しないんじゃないかったわけ？」

「というか、神父と牧師も宗派は違うし。」

と伊太郎は心の中で肩をすくめる。そう、もともと空知は自分が嘘をついているのを自己紹介の時点で明かしていたのだ。自分と宮治に経営上の接点何かないのだと。

「三綾さんはシスターっていても、まだ哲願だっけそれやってないんだって。つまり正式なもんじゃなくて見習いだったんだ。だから、ギリセーフなんじゃないの」

「納得いかないよ。っていうか、不意打ちよね。ありえない！だって、私が気がつかなかったんだよ。どうやってそんな……」

だから、僕らが知るのは世界のほんの断片でしかないんだって。

伊太郎は愚痴を続ける風香の背中の中に心の中でそう言った。

そう、司はもうすぐ結婚するのだ。今や元シスターになってしまった三綾と。確かに、彼らが付き合っているなんて誰も知らなかった。知らされ、彼女と一緒に宮治を世話していくと聞いた時、施設中がひっくり返った。

でも、伊太郎はどこかで「やっぱりね」と思った。

きっかけは、あの事件の時、宮治の様子を見に行くのに司が連れて行ったのが他でもなく、彼女だった事だ。

顔を合わせられない自分の代わりに面会を頼む相手。それはある程度の事情を知っている近しい人物でないとできないはずだ。

伊太郎は正直、共犯者は柳か彼女だと思っていて、柳にああは言ったものの、病院で柳の顔を見るまではどちらかの確証は持ってい

なかった。

で、三綾は共犯でないとすると……。

司が彼女がいないと、嘘をつき通していたのも彼女の立場を考えれば納得できる。

ま、こんな話、風香にすれば「どうして教えてくれなかったの」とそれこそ一晩中責められそうだから、絶対に話さないけど。

これはこれでいいんじゃないかと思う。

司の、あの『人に劣等感を与える容姿』も妻を持つことで、若干なりとその罪の色を薄くすることができるとも思えない。

そうこうしているうち、風香は買物かごいっぱいにお菓子や飲み物、カイロまで詰め込んでレジに向かってしまった。

「何だよ。こんなに買い込んで」

「今日はさ、付き合つてよ。おごつてあげるからさ」

なるほど、失恋に付き合えと言うのか。

外は死ぬほど寒そうだった。

一晩外にいたらきつと、朝には二人とも凍死体で発見されることになる。それでも、泣くのを堪え、いつもの舌も回せない風香の固い横顔をに、伊太郎は断りの言葉を投げつけるなんて事はできなかった。

ま、その時は空知神父に愚痴でも聞いて貰うかな。伊太郎は自分でも面白くないと思う冗談に舌を出す

「わかつたよ」

と頷いた。

風香はそれから乱暴にそのコンビニ袋を自転車の前かごに突っ込むと、再びペダルをこぎ出した。

こんな時間に中学生が凍死せずにいられる場所なんかないんじゃないかと言う伊太郎の心配は、杞憂に終わった。

風香が向かったの港の方だった。

風香はなれた様子で港に続くスロープを降り、崩れそうな小屋の前で自転車を止めた。

「ここ、誰も使っていないから」

風香の隠れ家なのかな？

本当に、僕は物事の断片しか知らないんだ。

そんな事を実感しながら伊太郎は風香について小屋のドアをくぐった。

外壁は木造だが、屋根はトタンでできていた。海の生臭さと鉄の錆びた匂いが夜気に交ざり合っていて、けっして居心地のいい空間とも、ましてや女の子の秘密のお部屋というった雰囲気もなかったが、伊太郎はそれなりに緊張して小屋の中を見回した。

「もともと宮じい的小屋なんだ。釣りが趣味でさ。そこらへんのは皆宮じいの釣り道具」

風香が小屋の真ん中につるされた裸電球を灯し、小さな電気ストープを付ける。

古い手漕ぎボートが立て掛けられていて、その周りに釣りざおやバケツが無造作に転がっている。

壁にはゴムでできた漁師が来ているようなつなぎまで掛けられている。

もう、二度と持ち主が現れないことを知っているかのように、それらは薄暗い部屋に色褪せて見えた。

「毛布は一枚しかないんだけど、いいよね。ってか、カイロもある

し、ストーブもあるし、やってけるかな」

「十分なんじゃない」

風香はまるで小さな子が草はらに作った秘密基地で遊んでいるかのような、無邪気さだ。妙に緊張する自分の方が伊太郎は恥ずかしい気もしたし、何にも感じない様子の風香にも少し腹が立った。

仮にも二人つきりなんだぞ。

毛布が一枚なんだぞ。

夜中に抜け出してるんだぞ。

そんな特別な事が、風香には気にならないんだろうか？

伊太郎は彼女が支度を終えるのを壁を背にしてじっと待った。

風香は菓子類を並べ、ようやく落ち着いたのか、当然のように伊太郎の隣に座り、一枚の毛布で自分と伊太郎の体を覆う。

向かいにある電気ストーブの朱色が風香の肌を照らしていた。

コトリ

卵一つ分くらいのしこりが伊太郎の胸の中で音を立てる。

しばらく風香はそうしないといけなくとも言うような、真剣な顔で唇を結ぶと、じっと自分の足元を見つめていた。

汚いスニーカーが毛布の先から二足並んで顔を出している。

「ずっと気になってたの」

「え？」

ドキリと胸が蹴り飛ばされ、伊太郎は風香の横顔を見る。しかし、風香の視線はどこかに漂い、伊太郎の事は見ていなかった。

そこで、ようやくこの役目は自分じゃなくてもいいのに気がつく。

あの事件の事を知っているのなら、伊太郎じゃなくてもいいのだ。きつと。

それに気が付いた時、悔しさとやるせなさで伊太郎は居心地が悪くなり、やはり風香のように自分の汚いスニーカーを見つめた。

「どうして司さんも、重清も、柳のババアも名乗りでなかったんだろ。だって、そうでしょ？ 相続を主張する位なんだから、始めから自分達は前妻の子どもとその子どもですって言えばいいんじゃない。こそこそ遺言書何か探さなくてもさ。それをあんな風にしたら、おかしくなったわけで」

伊太郎には、それは結果論だと思った。

蓋を開ければ宮治は娘の事を忘れてなどいなかったし、遺言書も彼女達の為にしたためられていた。

それがわかったからこそ、そう言えるが。おいてけぼりをくらった子どもには、きつとそれを確かめるのには勇気がある。そう、かなりの、だ。

「風香。こんな風に思ったことない？」

「？」

伊太郎の声に風香はじつと耳を澄ませる。

「忘れられるくらいなら、憎まれた方がましだ。忘れられるのが怖い」

柳は、怖かったんだと思う。司も、怖かったんだと思う。名乗り出ても、もしかしたら忘れられているかもしれない。めんどろがられたり、うとまれたら、それなりに哀しいだろうけど、共通の時間を軸にお互い揉める事だってできる。

でも、忘れられていたらどうなる？

共通に過ごしたはずの時間が、否定されたらどうなる？

それが、怖かったんだ。

とくに宮治はあの時物忘れが酷くなっていた。尚更、彼らは名乗り出るなんて事はできなかったのだらう。

「わかんない」

風香は拗ねたように吐き捨てると、唇を尖らせ缶コーヒーに手を伸ばした。二缶掴んで一つを伊太郎に差し出す。

両手で受け取ると、先まで冷えていた指先がジンジンとして、いたがゆかった。まるで、今の自分の気持ちのようだ。

伊太郎はじつとその指先を見つめる。

「でもね、僕も風香の意見には賛成なんだ。名乗り出てくれたら良かったのと思うてる」

「でしょ？　だつて」

「宮治さんはきつと気づいていた」

風香の声を遮って、そのことを言つと、風香はその大きな目を何度か瞬かせてから、ふっと微笑んだ。

「そう。それ。宮じいさ、しょっちゅう司さんのバイオリンの話、聞きたがつたんだもん。私も、司さんにそれ毎回報告してたんだけどなあ。宮じいとはどつかで勘付いてたんだよ。それで、待つてんだと思う。重清と」

重清の件についても、彼はきつと気づいていた。いくら行き場がないからと言っても、施設の間を全員引き取っていたら身が持たない。特に、重清は愛想がいいわけでも、何ができるわけでもない。唯一の特技は家庭菜園くらいだ。

重清を引き取ったのは、やはり孫だったからじゃないだろうか。

「司さんが一緒に住むのなら、重清さんは？」

「柳のババアと一緒に住んだつてさ。ババア、ああ見えても顔が広いから。あ、顔がでかいつて言う意味じゃなくて、知り合いが多いつて言う意味ね」

「わかるよ」

「あはは。で、その知り合いに農家がいるから、重清はそこで働くつて。親子の時間を取り戻すつもりらしいよ」

「そつかあ」

あの日、叫んだ重清の言葉。

伊太郎は思い出して、彼もまた報われることを素直に嬉しく思った。

「アルバム。面白かったね」

風香が缶コーヒーを握りしめながら呟く。

小さな気泡がゆるゆる上がって、弾けた。そんな感じの声に、僕は目をそらしてただ頷く。

宮治さんの家で見えたアルバム。

あの日、柳に言われて宮治の家に来た司が探しに来たのはこれだと、今日、聞かされた。

どうしてこれなのかわからない。でも、もしかしたら風香同様に『宮治の大切なもの』とでも言われたのかもしてない。そして、司が思ったのはこれだった。今際の際に必要なのは、遺言ではなく、記憶だと、思ったのかもしれないし、そうであってほしいと思ったのかもしれない。

「あれに、今度は三綾さんの写真も入るんだよね」

風香が寂しそう呟いた。

シスターの衣を脱いだ三綾は、司のとなりで幸せそうに微笑んでいた。愛する人とともに、恩のある人の世話が出来る。幸せだと。そう言っていたのを伊太郎も思い出し、切ない気持になる。

自分の母も、あんな風に思えたら、きっと幸せだったんだろうな。何が違ったんだろう。

「ああ」

傍に誰かいるかいなかだ。

母は孤独だった。三綾は孤独ではない。

孤独、寂しさ、それは人を狂わせるんだろう。時に、怒りや憎しみ以上の力でもって。

「寂しい？」

風香の顔を覗き込む。

風香は今にも泣き出しそうなあやふやな顔で笑って口を噤んだ。きつと、声をだせば泣いてしまうからだ。

本当なら、ここで抱きよせてキスでもして、忘れろと言ってしまいたかった。そんな想像、正直、何度もした。

でも、実際、伊太郎が出来るのは……。

そつと風香の片手を缶コーヒーからもぎ取ると、毛布の中で温めるように握った。

風香は一瞬驚いたように身を固くしたが、すぐにその手を伊太郎にあずけ、自分の膝に蹲るように体の力を抜いた。

寂しさは、独りじゃない証拠だ。

誰かといった温もりを知っているから、不意に独りになった時の寒さに凍え、俯いてしまう。もし、ずっと本当に一人なら、一人を寂しいとはきつと思わないだろう。

孤独を感じるというのは、そういう事なんじゃないかと、伊太郎は思っていた。

親のない、本当に赤ん坊のところに捨てられた風香の孤独を、すっかりくみ取るほどの大きさは、まだ自分の手にはないけど、寂しさの切れ端をこつやつて温めるくらいはできてもいいんじゃないか。

伊太郎はそう思った。

「温かいね」

風香が秘密を打ち明けるような声で言った。

伊太郎はただ頷いた。

風香の髪の毛の香りがして、肩に重みを感じた。風香が寄りかかっているのがわかった。微かに耳をくすぐる呼吸が、眠そうだ。

「風香は、自分の親、恨んでる？」

風香の中にある寂しさはどれだけ深いだろう。それはいつか柳達のように形を変えて彼女を飲みこみやしないか。伊太郎はそう思っ  
て訊いた。

しかし、風香はそれも曖昧に笑ってやり過ごした。

沈黙が津々と、冷たい夜に広がり、自分達の肌を凍らせようとする。しかし、毛布の下で繋がれた手は、凍る事はないと伊太郎は信じていた。

「伊太郎は、どうするの？ 春から」

風香の声がわき出たように虚空に浮かんだ。

「うん。一応、受けたのは奨学金がもらえて寮のあるところ」

伊太郎は、施設を出ていくつもりだった。できれば、いずれは母とも住むつもりだ。まだ決めてないけど、高校が受ければ、面接で母に相談する予定だった。

もう、母が孤独でなくていいように。

でも、風香は……。伊太郎はまだ沢山のものを抱えられない自分の手の小ささを痛感しながら、風香を握る手に僅かに力を込めた。

「ふうん」

「風香は？ 受験してたよね」

「うん。もう、決めてるんだ。 私もたぶん……春に、は」

風香の声がとろんとしてくる。

そして、話し終える前に、風香は完全に夢の中に溶けて行ってしまう。

その寝顔を見ながら、伊太郎は力を抜いて壁によりかかる。その時、初めて自分が今まで必要以上に肩に力を入れていたのに気がつき、小さく苦笑いした。

彼女の寝息が隣りで聞こえる。

長い睫毛が傍で揺れている。

触れたい唇がすぐそこにある。

でも、伊太郎は目を瞑った。

そして心の中でそっと彼女に自分の気持ちを告げてみる。

当然、聞こえるはずも伝わるはずもない。

ヘタレだな。とそんな自分を罵りつつも少し誇りに思いながら、

伊太郎も夢の中へと落ちて行った。

翌朝、寒さに目を覚ました。

見ると、風香は傍にいないくて、伊太郎は慌てて身を起こす。

風香はずつと前に起きていたらしく、ストーブの傍で慌てる伊太郎に赤い鼻をすすりながら「おはよ」と目を細めた。

二人で外に出た。

世界は水色に近い灰色だった。

空も海も、自分達が立っている場所も、皆同じ色だ。

夜明け前に世界の全てが息をひそめ、新しい一日の始まりを待っているかのような静寂に、この色はよく似あっていた。

二人で自転車を漕いで施設に戻る。

国道を走っている間に、日は昇り。施設に続く緩い坂道を昇る頃には、足元に影が差し始めた。

誰も起こさないように静かに自転車で中庭を抜け、自転車置き場に到着する。

「たぶん。絶対、怒られるよね」

風香はうんざりと言った顔で、携帯を伊太郎に掲げて見せた。何件も施設と司からの電話が入っている。

ま、これくらいの迷惑はいいでしょ。と伊太郎は肩をすくめた。並んで中庭を通り玄関に向かう。

その時、風香があゝの銀杏の木の下で立ち止まった。

伊太郎は不思議に思い、数歩先に進んでいた足を止め、振り返る。風香は葉のないその木を見上げていた。

「伊太郎。昨日、私が親を恨んでないか、訊いたよね」

「あ、うん」

風香は今度は根元に視線を降ろした。ちょうど、風香が捨てられていたと言われている場所だ。

「私はね、恨んでないよ」

「え？」

「私をここに連れて来てくれた誰かさんは、確かに私を置き去りにしたかもしれない。でも、愛してくれてたんだって、知ってるから」

どういう事だ？ 風香には何も残されていない。身元を証明するものも、生まれた日がいっつであるかを教えるのも。

なのに……伊太郎は首を傾げ風香を見つめる。

風香はまるで幼い自分を見ているかのような眼差しで、じっとそこに目をやる。

「私がここで見つけられたのは、暑い日なんだってね」

今とは正反対の季節だ。

風香はもう一度顔を上げた。

そこに生まれたての朝日がさして、彼女の頬を照らした。

風香は目を細め、まるで真夏の銀杏をそこに見ているかのような顔をした。そしてそっと告げた。

「きっと、その時、ここには優しい木影が私を包んでいたんだろうなあ」

伊太郎ははつと息を飲んだ。

確かに、もし、ただ置き去りにするのなら玄関でいいはずだ。捨てる現場を押さえられるリスクもずつと少ない。

敢えて、この木の根元にしたのは、玄関先の厳しい日差しの中ではなく、ここに……。

赤ん坊を包みこむ、優しい木影が伊太郎にも見えたような気がした。

風香が振り返った。つくづく。自分の知っているのは世界のほんの断片でしかないのを思い知る。

朝日の中で風香は微笑み

「私、春から空知神父の所に行くの」

と宣言するようにそう言った。

実は、そんな気がしていた。

伊太郎は風香の顔を見る。

風香もまた、新しい居場所を自分で見つけたのだ。

二人で朝日の中、振り返った。

新しい一日が差し込むあの窓際。そこには、もう、うかない顔の少年の顔はなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5260g/>

---

ある少年の告白

2010年10月11日12時03分発行